



鳥取県羽倉町



# 長瀬高浜遺跡Ⅱ

寄贈

天神川流域下水道事業に伴う砂丘遺跡の発掘調査概報(1)

1979

財團法人 鳥取県教育文化財団



第一図 1号墳の全貌



# 序　　言

当財団が鳥取県の委託を受け、昭和52年8月から実施している天神川流域下水道事業大神処理場築造工事に伴う埋蔵文化財の試掘調査いわゆる長瀬高浜遺跡の、昭和53年度における調査報告をここにお送りしたい。

長瀬高浜遺跡Ⅰで申しのべたように、この調査には著しい困難を伴うのであるが、本年度は、更に原地形表面より10m或はそれ以上の深部から古墳10基以上を始め、種々の遺構を発掘し、この調査の困難さは倍加した。

この遺跡の性格については、未だ確定するに至ってはいないのであるが、出土品等からみて、弥生前期から一部近世にまで及ぶ複合遺跡である様相が極めて濃厚となりつつある。

果してそうであるとすれば、砂丘深部からこの様な遺跡が発掘された例は全国的にも稀であろうし、当財団は更に決意を新たにしてこの調査に当たりたいと考えている。

長瀬高浜遺跡Ⅰに述べたように、この調査にあたって多くの方々の御指導、御援助と御協力を頂いたのであるが、本年度は更に奈良国立文化財研究所（文部技官沢田正昭氏）、京都大学理学部自然人類学教室（准教授池田次郎氏）、鳥取大学地質学教室（教授豊島吉則氏）、同地学教室（教授赤木三郎氏）を始め多くの方々の御指導と御協力をいただいた。ここに深く謝意を表する次第である。

昭和54年3月

財団　鳥取県教育文化財団  
法人

常務理事　木　村　耕　造



<10>0100574904

# 調査関係者

総括	木村 耕造	鳥取県教育文化財団常務理事
	古町 政春	同 前事務局長
	養田 明	同 事務局長
指導	山本 清	鳥取県文化財保護審議会委員
	佐々木 謙	同
	手嶋 義之	同
	豊島 吉則	鳥取大学教育学部教授
	赤木 三郎	同
	県教委文化課	
調査員	森田 純一	鳥取県教育委員会文化課
	田中 秀明	同
	田中 精大	鳥取県教育文化財団職員
	影山 和雅	同
	久保穂二朗	同
	西村 彰滋	同
	中村 敬	同
	国田 一夫	羽合町文化財保護委員長
	安達 幸範	羽合町教育委員会
	山形 顕応	法泉寺住職
協力	県土木部下水道課	
	倉吉土木出張所	
	羽合町	
	羽合町教育委員会	
	羽合町長瀬地区、浜地区、橋津地区、南谷地区、下浅津地区、東郷町長江地区他	
例言		
1.	この報告書は昭和53年度鳥取県から委託を受け、財団法人鳥取県教育文化財団が実施した天神川流域下水道事業に伴う長瀬高浜遺跡の昭和53年4月1日から昭和54年3月31までの調査の概況報告書である。調査本報告書は後日作製発刊の予定である。	
2.	報告書の作成には討議をもとに、森田純一、田中精大、影山和雅、久保穂二朗、西村彰滋が分担執筆した。	
3.	航空写真（表紙）は県立博物館定点写真（1978年度撮影）による。	
4.	出土遺物は、教育文化財団が羽合町旧役場で保管し整理中である。	
5.	本書に使用した方位は磁北を示す。	
6.	本書に使用した遺構略号は火葬墓（SF）石棺（SX）とした。	

# 目 次

## I 序 章

1. 調査の経過.....	(1)
(1) 遺跡の発見.....	(1)
(2) 試掘調査.....	(1)
(3) 発掘調査.....	(1)
(4) 調査日誌彙報.....	(4)

## II 遺 跡

1. 遺跡について.....	(3)
(1) 遺跡の位置.....	(3)
2. 遺跡の自然環境.....	(8)
A. 長瀬高浜遺跡の自然環境.....	(8)
B. 長瀬高浜遺跡とその周辺の地質（中間報告）.....	(15)
3. 1号墳と周辺遺構について.....	(25)
(1) 火葬墓.....	(25)
(2) 1号墳—その築成方法と埋葬施設について.....	(27)
(3) 1号墳周辺石棺群.....	(33)
(4) 1号墳並びに周辺遺構出土遺物.....	(37)
(5) まとめ.....	(38)
4. 弥生時代の合口土器棺墓について.....	(39)
5. 東部地区遺構について.....	(41)
(1) 概観.....(41)   (2) 白砂中石棺.....(43)   (3) 白砂中人骨.....(44)	
(4) 土壇状遺構.....(44)   (5) 五輪塔群.....(44)   (6) 屈葬人骨.....(45)	
(7) 土器群.....(45)   (8) 火葬墓（13EのIa）概況.....(46)	
(9) 東部地区のまとめ.....(47)   (10) 東部地区遺物.....(48)   (11) 東部地区遺物の説明.....(52)	
6. 中央管理棟建設地内緊急調査地区	
(1) 概観.....(53)   (2) 五輪塔群.....(54)   (3) 石槨状遺構.....(57)	
(4) 石蓋土壇.....(57)   (5) 溝状遺構.....(58)   (6) まとめ.....(59)	
III まとめ.....	(60)

# 挿図表目次

第1図	1号墳の全貌	(口論)	第48図	東部地区遠望(南東より望む)	40
第2図	道路の位置図	(3)	第49図	東部地区砂層模式図	41
第3図	遺跡地周辺航空写真	(4)	第50図	東部地区クロ砂層地形図	42
第4図	長瀬高浜道路調査位置図	(5, 6)	第51図	白砂中石棺写真	43
第5図	長瀬高浜道路調査地区的名称	(7)	第52図	白砂中石棺実測図	44
第6図	山陵におけるクロスナの分布地	00	第53図	白砂中人骨写真	45
第7図	長瀬砂丘の下の旧砂丘の地形復元図	11	第54図	上瀬状遺構写真①	46
第8図	長瀬砂丘の新砂丘下にみられる3枚のクロスナ層	02	第55図	上瀬状遺構写真②	46
第9図	新砂丘、旧砂丘および海域シルト層を示す断面図	03	第56図	土壌状遺構実測図	46
第10図	クロスナの某段頗度曲線	09	第57図	五輪塔出土状況写真	45
第11図	クロスナ中の植物群集体の形態による分類(福井ひとみ原図)	08	第58図	庭葬人骨写真	45
第12図	クロスナの生成断面スケッチ	09	第59図	庭葬人骨火葬図	45
第13図	クロスナ表面にみられる生痕写真	09	第60図	東部地区火葬墓実測図	46
第14図	1号墳及び周辺遺構位置図	(21, 22)	第61図	東部地区火葬墓写真	46
第15図	1号墳並びに周辺石棺群位置図 (墳丘断面図-東西断面図) (墳丘断面図-南北断面図)	(23, 24)	第62図	土器群出土状況写真①	47
第16図	火葬墓写真(S F-39, 43, 44)	25	第63図	同 上 ②	47
第17図	火葬墓実測図(S F-39, 43, 44)	26	第64図	土器群実測図	47
第18図	1号墳遺跡写真(墳丘調査時)	27	第65図	東部地区出土遺物写真①	48
第19図	1号墳遠望写真(墳丘調査後)	27	第66図	同 上 ②	48
第20図	康の広がり写真(北方向より望む)	28	第67図	同 上 ③	49
第21図	墳丘東側断面写真(北方向より望む)	29	第68図	同 上 ④	49
第22図	墳丘北側断面写真(東方向より望む)	29	第69図	同 上 ⑤	50
第23図	墳丘西側断面写真(南方向より望む)	29	第70図	同 上 ⑥	50
第24図	墳丘南側断面写真(西南方向より望む)	29	第71図	同 上 ⑦	51
第25図	1号墳丘内埋葬施設展開図	30	第72図	同 上 ⑧	51
第26図	墳丘内埋葬施設開蓋前写真	31	第73図	緊急調査地内全景写真	53
第27図	墳丘内埋葬施設検出状況写真	31	第74図	のり面断面写真	53
第28図	墳丘内埋葬施設検出状況写真	31	第75図	五輪塔群実測図	54
第29図	墳丘内埋葬施設沿塀周辺写真	32	第76図	五輪塔群写真	54
第30図	墳丘内埋葬施設沿塀写真	32	第77図	クロ砂層概念図	(55, 56)
第31図	S X-01箱式石棺写真	33	第78図	緊急調査地内平面図	(55, 56)
第32図	S X-03箱式石棺写真	33	第79図	のり面断面図	(55, 56)
第33図	S X-06箱式石棺写真	34	第80図	石棺状遺構実測図	57
第34図	S X-13埴輪円筒棺写真	34	第81図	石棺状遺構写真	57
第35図	S X-12箱式石棺実測図	35	第82図	石蓋上部写真	57
第36図	S X-12箱式石棺写真	35	第83図	石蓋土壤火葬図	58
第37図	1号墳丘上須恵器群写真	37	第84図	構造遺構写真	58
第38図	1号墳丘上出土埴輪写真	37	第85図	須恵器写真	58
第39図	1号墳周溝出土土器群写真	37	第86図	變写真	59
第40図	1号墳周溝出土上部器実測図	38	第87図	土師質土器写真	59
第41図	合口土器群出土上部写真	38	第88図	泉切十二线写真	59
第42図	合口土器群出土上部写真	38	第89図	弥生土器写真	59
第43図	合口土器群出土状況写真	38			
第44図	合口土器群出土上部器実測図	38			
第45図	縁写真	40			
第46図	壺可真	40			
第47図	東部地区遠望(西方より望む)	40			
			第1表	長瀬高浜砂丘中のクロスナの比較	66
			第2表	火葬墓の分類	26
			第3表	1号墳周辺箱式石棺計数表	35

# I 序 章

## 1. 調査の経過

### (1) 遺跡の発見

昭和49年5月県教委が行なった国道9号線北条バイパス建設に伴う現地踏査で長瀬高浜一帯に弥生土器・土師器が濃密に散布しており、南に隣接する「天神川流域下水道事業天神浄化センター」建設予定地にも散布地が広がっていた。

### (2) 試掘調査 第1次（昭和52年次）調査

遺跡発見以後、県教委と県土木部の関係者の協議の結果、8月から試掘調査を行なうこととなり、財団法人鳥取県教育文化財団（理事長知事）が調査を行ない、経費は県土木部の委託費によった。調査対象地は、施設用地10haのうち第1期工事予定地で工事により埋蔵文化財と直接影響を及ぼすと考えられる約5haとした。調査方法は、グリッド方法により、5m×5m、5m×10m、10m×10mとし計32か所約3,000m<sup>2</sup>の試掘を行なった。砂丘地であるため、試掘表面は100m<sup>2</sup>でも7mも掘り下げれば底面積は1m<sup>2</sup>程度となってしまう。試掘には、検土杖、ハンドオーガーポーリングを使用しながら、砂丘地の遺物包含層はクロ砂層（黒褐色腐植砂）であることをつきとめ、地表下7mも掘り下げる場合には重機（ユンボ）の併用も行なった。

試掘（約3,000m<sup>2</sup>）及び一部拡幅調査（約1,500m<sup>2</sup>）の調査を行なった結果、円墳（1号墳）1基、中世火葬墓25基、古墳時代箱式棺6基を検出した。また、遺物には多数の弥生時代前期土器・土師器の中には、壺、甕、高杯が多く含まれ、石斧、石鎌、砥石、土鍤、紡錘車など生活用品も多いことがわかった。（昭和52年度 試掘調査費委託料 11,830,000円）

### (3) 発掘調査 第2次（昭和53年次）調査

試掘調査の結果に基づき関係部局との協議の結果、下水処理場建設計画、施設配置計画の変更は不可能のため、昭和53年度引きつき全面発掘調査を実施することとなった。

調査主体は、県教育文化財団が引きつき行ない、調査員を増強して発掘調査を開始した。調査は、試掘調査で確認した1号墳及びその周辺地区約16,000m<sup>2</sup>（①1号墳上層の火葬墓群、②1号墳下層の竪穴住居跡状遺構等、③1号墳周辺の石棺群）に重点をおき実施したところ、クロ砂で形成された遺構が複合しており、難解を極め調査時日も要した。

東部地区は、数mから10数mに及ぶクロ砂上層の灰白色砂層（現在の砂丘砂）の除去を重機により行ない、その後をベルトコンベアによりクロ砂面の拡大を実施したところ約14,000m<sup>2</sup>ものクロ砂層を確認し、クロ砂はさらに拡大して行くものと十分に予測される。一帯に広がるクロ砂層の遺構概要を握り、今後の調査計画立案の基礎資料を得るためにも、13-E、13-F約800m<sup>2</sup>の発掘調査にとりかかった。クロ砂層は、多量の土師器を主と

する遺物包含層で土器完形品は多いが明確な遺構検出には苦慮し、竪穴状遺構2か所を検出した。また、灰白砂除去により古墳11基も検出した。当初施設南の中央管理棟建設予定地のクロ砂は消滅していると考えていたが、工事中に地表下約13m（標高3m）で3層のクロ砂を発見し、緊急調査を行なった。その結果五輪塔群等を検出し砂丘形成期を知る貴重な資料を得た。（昭和53年度 発掘調査費委託料 41,000,000円）

#### （4）調査日誌彙報

- 昭和53年4月1日 長瀬高浜遺跡発掘調査開始。
- 4月4日 作業員の増強を行ない、1号墳の調査に取りかかる。
- 5月8日 レンチを1号墳北側に3本、東側に1本入れて周溝確認調査を行なう。
- 6月2日 SX-08石棺の蓋石を除去し棺内調査を行なう。
- 6月9日 1号墳北東部周溝の肩で完型の土師器壺2点、甕1点を検出する。
- 6月15日 12-D区画内南側のクロ砂層が消滅していく地点で屈葬人骨検出。
- 6月16日 京都大学理学部自然人類学教室の池田博士招聘。人骨の鑑定依頼。
- 6月23日 SX-02石棺蓋石除去後棺内調査。V字状石枕、頭骨、歯片検出。
- 6月29日 SX-01石棺蓋石除去後棺内調査。歯片、土玉検出。
- 7月19日 17-G区画内で合口土器棺検出。
- 7月21日 1号墳の埋葬施設の調査に入る。箱式石棺に粘土目張りを確認する。
- 7月27日 1号墳第1埋葬施設の蓋石を取りはずし棺内調査。
- 7月28日 SX-06蓋石除去後棺内調査。V字状石枕、人骨数点検出。
- 8月1日 第1回現地説明会を行なう。
- 8月9日 SX-12石棺の調査に入る。棺内で人骨・鉄鎌・直刃・鉄剣出土。
- 9月8日 1号墳北東部周溝内で填縫円筒棺検出。
- 9月12日 ウレタン樹脂を使用して、石櫃状火葬墓（SF-39、SF-44）を現状のまま取り上げる。
- 9月28日 17-G区画内出土の合口土器棺の調査開始。
- 10月2日 東部地区の調査開始。
- 10月11日 1号墳の解体調査開始。
- 10月26日 内でクロ砂層を発見。工事を中断し緊急調査に取りかかる。
- 11月6日 東部地区第2期工事予定地の遺構確認調査に入る。
- 11月13日 工事区域内で弥生土器・土師器・須恵器・土師質土器・皇朝鏡等を検出。緊急調査終了する。
- 11月25日 13-E区画内で小型彷製鏡出土。
- 昭和54年1月16日 1号墳の調査終了。直ちに1号墳下層の遺構調査に入る。
- 3月31日 昭和53年度調査終了。

## II 遺 跡

### 1. 遺跡について

#### (1) 遺跡の位置

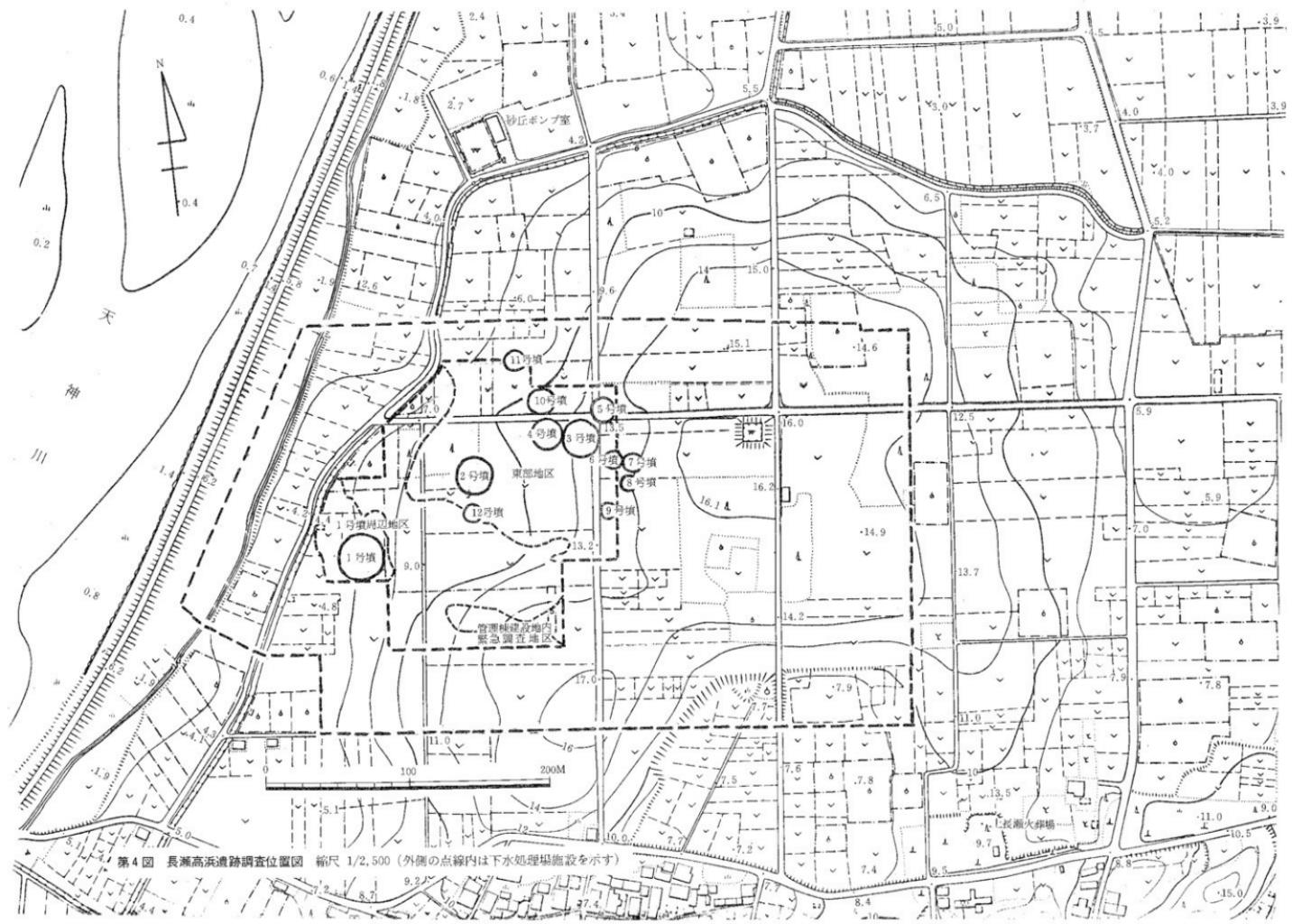


第2図 遺跡の位置図

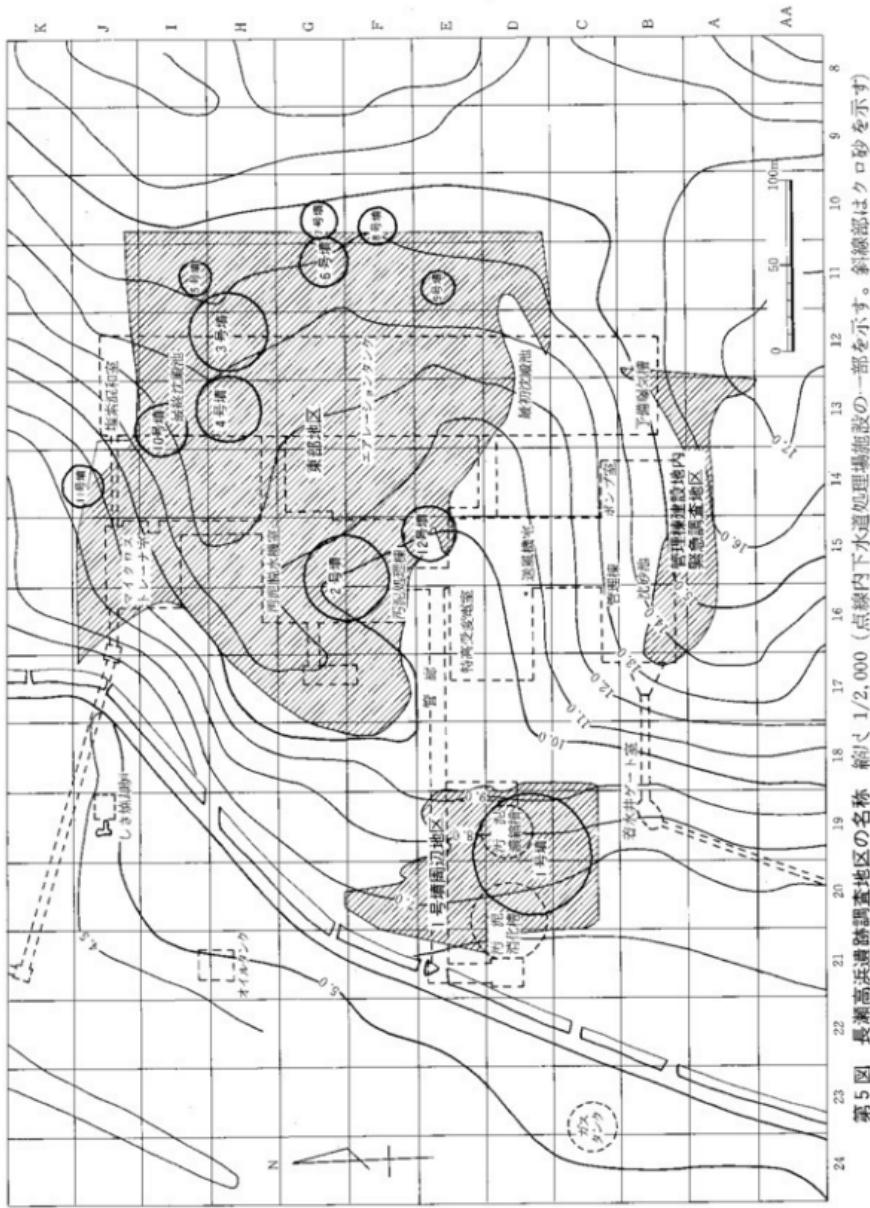
- ① 長瀬高浜古墳群 (長瀬高浜古墳群)
- ② 橋津古墳群
- ③ 宮内古墳群
- ④ 北山古墳群
- ⑤ 大平山古墳群

第3図 遺跡地周辺航空写真





第4図 長瀬高浜遺跡調査位置図 縮尺1/2,500(外側の点線内は下水処理場施設を示す)



第5図 長瀬高汎跡調査地区の名称 約1/2,000 (点線内下水道処理施設の一部を示す。斜線部はクロ砂を示す)

## 2. 遺跡の自然環境

### A. 長瀬遺跡の自然環境

豊島吉則

#### (1) 長瀬高浜遺跡の地形

長瀬高浜遺跡…帶の砂丘は北条砂丘の東部に位置し、海岸から約1,300mの距離の内陸側に位置する。砂丘はその最高点が17m余で、ドーム状の形態のやや孤立した地形である。このドーム状砂丘地形の西側斜面の下に、新砂丘の白い砂におおわれた長瀬高浜遺跡が存在する。この砂丘の北方や西方は海拔4~6mの平坦な砂堆積地形が発達している。この平坦な地形をつくる砂は、砂丘の砂よりもやや粒度が粗く、地形が平滑なことから北条砂丘の北部、西新田場から台場跡にかけてみられる海拔5~6mの浜堤地形と同じ、海の波によって形成された海成堆積地形であると考えられる。

砂丘および砂堆積地形の南端には長瀬の集落が東西に細長く分布し、その南方には沖積平野が展開している。砂丘地帯に接して沖積平野の北側に天神川の旧流路がみられ、元文年間(AD1734~1741年)に現在の河道に付替えられる前には、天神川はこの旧河道に沿って、砂丘地帯の南縁を東方に流れている。砂丘列は海岸に平行な第1列、海岸と斜行する第2列の砂丘がある。江北の天神山の砂丘は長瀬高浜と連続して第2列をかつては形成していた筈である。これらの新砂丘の下にクロスナにおおわれた旧砂丘がかなり広く分布しているらしい。浜部落付近の畠土をみると明らかにクロスナであり、高浜遺跡北方の砂丘ポンプ室付近のぶどう畠にもクロスナがみられる他、長瀬地域周辺にかなり広くクロスナが分布することが予察できる。

#### (2) 砂丘の内部構造

##### イ. クロスナ問題の研究史

日本海沿岸の砂丘内部に新旧の砂丘が存在する事実はかなり古くから知られている。川田三郎は石川県河北潟砂丘で、小笠原義勝は庄内砂丘で「黒色腐植層」の存在を第2次大戦直後にすでに指摘している。

その後、1960年代に各地で砂丘の開発や砂の採取が進行し、これと前後して砂丘の内部構造の研究が鳥取・石川・新潟などの各県で盛んに行なわれるようになった。豊島・赤木(1964)は鳥取県気高町の宝木高浜砂丘の内部に黒色腐植質砂層を発見し「クロ砂」と名づけて、砂丘形成史の重要な鍵層となることを指摘した。この発見以後鳥取県内では、鳥取市新田・白兎や鳥取県西部、弓ヶ浜半島の内浜砂丘などの各地で考古学的遺物を包含する同種の「クロ砂」が発見され、豊島・赤木(1965)によって報告された。そして火山灰を母層として発達するのがクロボクであり、砂丘砂・浜堤砂などを母層として発達したものが「クロ砂」であり、両者は時代的に対応するらしいことも指摘された。

山口県においても小野（1963）が砂丘の中に黒色砂層や化石砂丘を認め記載しているが、「クロスナ」に関してはあまり述べていない。新潟県佐渡島の国中平野西部の砂丘については式（1964）が黒褐色腐植層におおわれる古い砂丘があるとし、この腐植層は弥生～平安期の遺物を包含していると指摘した。北陸においては藤・尾崎（1958）が砂丘の下位にある泥炭層について注目して以来、新砂丘下の黒色土壤についての研究が積み上げられてきている。1968年には鳥取大学において日本地理学会秋季大会が開催され砂丘に関するシンポジウムが行なわれた。このシンポジウムで遠藤邦彦はクロスナ層が多くの地域で二層みられること、それらを旧期クロスナ層（Ho）、新期クロスナ層（Hy）とよび、それらによって沖積世の砂丘が旧砂丘（Do）、新砂丘Ⅰ（Dy I）、新砂丘Ⅱ（Dy II）の3つに区分されることを述べ、このような現象が海面変動や気候変化と関連するものと予想した。さらに1975年金沢大学で日本第四紀学会が開催され「日本海沿岸の砂丘」のシンポジウムが再び行なわれた。このシンポジウムにおいて日本海沿岸各地の砂丘の新しい知見や詳細な分析が発表されたが、その中で角田消美は3枚のクロスナを鍵として砂丘の固定期と形成期を論じている。また山陰のクロスナに関してはこの時の発表をもとにした豊島（1975）の論文がある。島根県の砂丘にはクロスナ層がほとんど報告されていなかったが、江津・浜田間の太平山砂丘で上下2枚のクロスナ（下位クロスナは繩文中期～古墳初期、上位クロスナは955±75Y.B.P）が角田他（1978）によって発見・報告され他の砂丘地でもクロスナが発見されつつある状況である。

このようにクロスナ層は北は北海道から南は九州まで、各県ほとんど例外なく砂丘から発見され、地理学・地質学・考古学・気候学などからきわめて重要な地層として注目されるようになってきたのである。

#### ロ. 山陰のクロスナの特性

遠藤（1968）によると、クロスナのうち旧期クロスナは、沖積世の砂丘を旧砂丘と新砂丘に二分する重要な地層で、その年代は繩文中期～弥生（4500Y.B.P～2000Y.B.P）であると言う。新期クロスナは古墳期から奈良期の上器片をふくむものであり、層厚は薄く、やや不安定な土壟化が認められる。そしてとくに旧期クロスナ層形成の原因は世界的な気候の悪化・寒冷化・湿润化に帰せられると予想した。

山陰においては砂丘内に腐植層あるいは黑色層があることは、郷土研究者によってかなり古くから知られていたようである<sup>参1</sup>とえば島根県江津市波子遺跡は砂丘に介在する黒色土を包含層とする繩文中期～古墳前期の遺跡であり、この発見は昭和20年代であった。この遺跡の包含層をクロスナとして、その後角田（1978）が再評価したことはすでに述べた。出雲の大社砂丘中の褐色砂層からは弥生前期～古墳期の土器片や石器が出上し、原山遺跡として知られるが、この調査は昭和23年に行なわれている。筆者も大

社砂丘を踏査して、このような暗色砂層を観察したが、やや窓植の量が少ないと典型的なクロスナ層とは云えないよう思った。出雲平野の長浜砂丘や島根半島の古浦砂丘などにも弥生遺跡がある。長浜砂丘多聞院貝塚は黒褐色上層（クロスナ？）中に弥生中期末の土器が出土している。また古浦砂丘は弥生後期～古墳期初頭の遺物包含層が認められている。この他第6図にみられるように、島根県では江津市波子、益田の高津などにも、それぞれ縄文中期～古墳前期、弥生前期～古墳期の遺物をふくむクロスナが発見されるに至った。

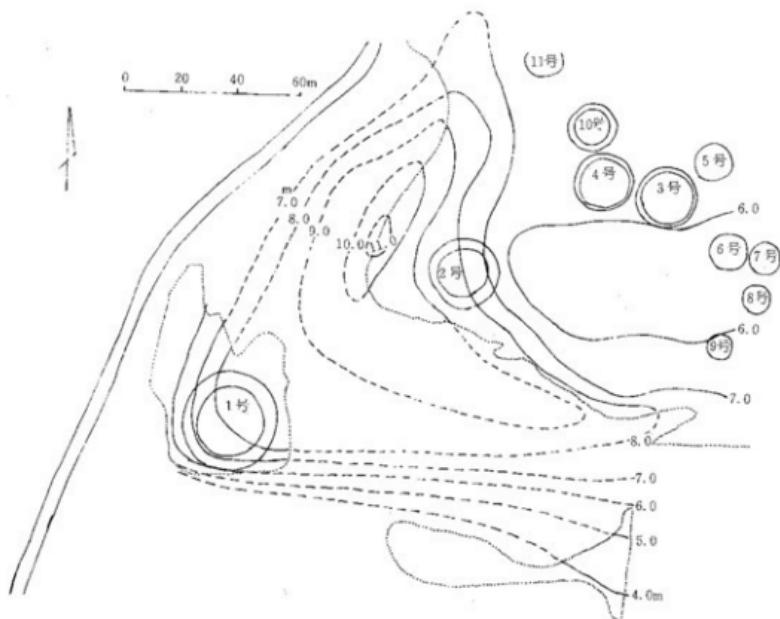
鳥取県においても弓浜半島のものは佐々木謙によつて砂丘遺跡として早くから知られてきたようである。層位的にクロスナと一致するかどうかは明確ではないが弥生中期～古墳期の遺物が内浜一帯から出土している。北条砂丘においては、長瀬遺跡以外では東園において筆者が弥生後期の土器



第6図 山陰におけるクロスナの分布地

をクロスナ巾から発見した。また宇谷では古墳期、石脇では弥生～古墳期のクロスナがみられる。鳥取県東部においては宝木高浜で弥生後期～奈良期、白兎においては弥生～中世の遺物の包含層が発見され、新田において須恵器が発見されている。このように山陰のクロスナの分布地は顕著な遺跡で15地点となり、実際には20地点をはるかに上廻る地域で認められるし、今後クロスナの分布地域は砂丘地帯の開発が進むとともにますます広がると予想される。クロスナが2枚以上確認されているのは、島根県波子、鳥取県東園、長瀬、白兎の各地であり、長瀬では3枚、他の3地点では2枚が認められた。クロスナ中の土器形式からクロスナの形成時代を判断すると、もっとも古いものは縄文中期の土器片があり、もっとも新しいものは鎌倉時代のもの（近世の遺物が混在することもある）がみられるから、クロスナの下層のものは縄文中期にさかのぼる古い形成であり、上層のものは鎌倉時代あるいは近世までに形成されたらしいことがわかる。

しかし、クロスナから出土する土器は弥生中期から古墳期にかけてのものが多く、とくに土師器が圧倒的に多い。このことは人間と砂丘とのかかわりを考える上で手掛りを与える事実である。



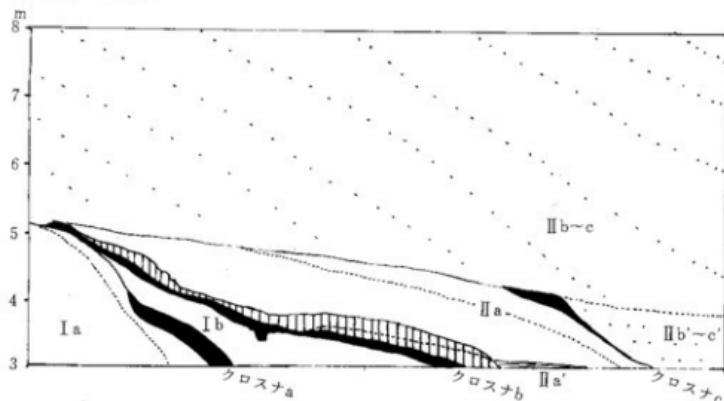
第7図 長瀬砂丘の下の旧砂丘の地形復元図（点線はクロスナと白砂の境界）

#### ハ、長瀬砂丘のクロスナ

この砂丘の西側では新砂丘を1~2m掘るとすぐクロスナが露出するが東側では数mないし10m以上掘らないとクロスナが露出しない。新砂丘が厚いところでは15mもクロスナをおおっていた。新砂丘の西北斜面は冬季の卓越風によって風食され一部ではクロスナが地表に露出している。新砂丘の砂層を除去してしまうと、広大なクロスナ面が地表に現われた。第7図はクロスナが残っている部分の地形から判断して、クロスナが被覆していた当時の砂丘地形を復元した「旧砂丘の地形復元図」である。クロスナは点線で囲んだ部分にみられるが、風食や雨食などの侵食作用によってかなりの部分が失なわれている。侵食された部分の復元等高線を破線、残存しているクロスナ表面の等高線を実線で画いた。復元された地形は最高点が海拔11mであり、その最高点から北北東と東南東の方向に稜線を張り出した地形で、ブーメラン状あるいは三角形の平面形を有する「旧砂丘地形」を示している。そして、その稜線部分が侵食で削剝されているのである。削剝された部分は西北から南東に延びる方向であり、主として西北風の卓越による風食によって失なわれたらしいことが想定される。砂丘の旧地形は南側が急斜していて、砂丘の風下斜面を形成しているものと思われる。旧砂丘地形の東側は海拔6m内外のかな

り平坦な地形が広く発達していて、3号墳から11号墳の大小の円墳がこの平坦地に密集している。この平坦面の東側と北側には新砂丘砂が厚く堆積したまま、除去されてないので、旧砂丘地形がどのような全貌をもつかは連続できないが、10-Jでは海拔11mの水準にクロスナが予想されるので東側にもう一つの砂丘の稜線があると考えられる。したがって海拔6m内外の平坦面は砂丘間の凹地地形と考えられる。6m内外の平坦面は、自然の力で形成された後、円墳の築成のため多少人工的に修正されているのであろう。

## ニ、3枚のクロスナ層



第8図 長瀬砂丘の新砂丘下にみられる3枚のクロスナ層（中央管理棟緊急調査区）

長瀬浜遺跡はクロスナが3枚認められた点からも注目されるべきである。3枚のクロスナが発見されたのは遺跡の南東端13-A、Bのあたりであった。その断面は第8図のようで、a・b・cの3枚のクロスナが明瞭に確認されている。クロスナaは漆黒色で、厚さ50~60cmであり、クロスナbは暗褐色で厚さ20cm、クロスナcは暗褐色~黒色で厚さ最大で30cm、南に向って急激に薄くなり尖滅する。クロスナbはその上下に暗色帯があり全体で60cmくらいの厚さになる。

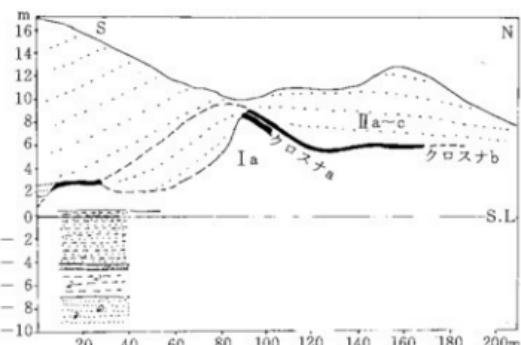
クロスナaからは弥生前期~古墳前期の土器が発見され、bからは古墳時代~鎌倉期の遺物が出土している。クロスナcからは中世から近世にかけての土器が出土している。クロスナaの下位には黄色に風化した旧砂丘砂がみられ、これをIaとした。クロスナaとbの間にみられる厚さ1m弱の黄色砂層をIbとした。またクロスナbとクロスナcの間の淡黄色砂（厚さ1.0~1.5m）をIIaとし、クロスナcより上位にある灰色の砂層をIIb~cとした。この記号は鳥取市白兎身干山砂丘についての見解（豊島、1975）と同じである。なおIa中からは縄文晩期の土器片が出土し、クロスナbからは皇朝鏡である貞觀永宝（AD870年鋳造）が出上している。またbのクロスナ層の中央部には竪穴

状落ちこみがあり、鎌倉初期の土器はこの部分から出土している。落ちこみの中の地層は擾乱層であるから、クロスナ b 層は鎌倉期よりも以前に堆積したと考えても矛盾はない。この遺跡の他の場所での知見を加えて、クロスナの形成期を推定すると、クロスナ a は弥生前期～古墳前期、クロスナ b は古墳後期～平安期、クロスナ c は中世（鎌倉以後）～近世初頭ぐらいと比定される。クロスナ c の上面は IIa とともに人工的にカットして平坦化されており、その面の上に厚さ 10～12m の灰白色新砂丘砂が堆積している。IIa の下に青灰色粘土（IIa'）、IIb～c の下位に IIb'～c' がありともに水つきの地層の特性をもっている。

#### ホ. 砂丘の断面的構造

第4図に 14 line に沿った南北方向の断面図を画いた。クロスナ a・b より上位の新砂丘 IIa～c、下位の Ia がみられ、その下は海拔 0.5m くらいから下は海成～汽水性堆積物がみられる。浄化槽の工事現場での観察によれば +0.5m 内外から下位に灰色シルト混り砂層、泥炭混り砂層が互層し、-4.0m～-4.5m に成層良好な黒色粘土層、その下位 -7.0m まで黒灰色シルト層、-7.0m 以下は灰色海成砂層がみられ、黒灰色シルト層には豊富な貝化石（Anadara など）が含まれ、-8.0m の水準からはカキ（Ostrea）が採取され、これらは現在年代測定中である。

さて、長瀬付近の沖積層の基底は、江北天神社では地下 32m で玉石層がみられ、長瀬終末処理場でもほぼ同水準で玉石層が存在する。東郷池北縁の南谷では地表下 23m で基盤岩、橋津河口部では地表下 17m で岩盤にあたっている。したがって岩盤や玉石の上位の砂・シルト層（貝殻混り）は沖積層とみることができ、沖積層の厚さは、西にゆくほど厚くなるようである。長瀬遺跡の多数のボーリング結果をみても、海面下 30m 内外の水準で玉石層になっており、厚さ 20～25m のシルト～砂の互層が、その上にのっており、これが繩文海進に対応する海成層であるらしい。その上に旧砂丘砂が現海水準の上・下若干の水準から堆積し、さらにその上に新砂丘砂がおおっているのである。



第9図 新砂丘、旧砂丘および海成シルト層を示す断面図  
ルト層（貝殻混り）は沖積層とみることができ、沖積層の厚さは、西にゆくほど厚くなるようである。長瀬遺跡の多数のボーリング結果をみても、海面下 30m 内外の水準で玉石層になっており、厚さ 20～25m のシルト～砂の互層が、その上にのっており、これが繩文海進に対応する海成層であるらしい。その上に旧砂丘砂が現海水準の上・下若干の水準から堆積し、さらにその上に新砂丘砂がおおっているのである。

### (3) 長瀬高浜遺跡の自然環境の変貌過程

長瀬遺跡は繩文海進以後に形成された旧砂丘の上に築かれたものである。初期においては旧砂丘は南側に入海を控えていたであろうが、その入海は次第に潟湖状に変わりやがて乾燥化して、天神川が旧砂丘の風下斜面に沿うて東流していた。弥生時代には海水準が現在より低下し、砂丘が固定されてクロスナa層は厚く旧砂丘を被覆した。この頃旧砂丘の稜線部にかめ棺が埋葬されたり、屈葬が行なわれたかも知れない。

しかし古墳時代に入ると、人々はより頻繁にこの地を訪れるようになり、旧砂丘南西端の展望の良好な地点に1号墳の築成が行なわれ、また砂丘間凹地にもやや小型の円墳の築成が行なわれた。築成は、クロスナa層をうがって周溝を掘り込み、円墳中央部は削平し、石棺安置後、黒色砂土の盛り上げを行なった。ふき石は、砂丘の南側を流れる天神川の河原から運んだから、作業は容易であったであろう。

その後、古墳期後半までは砂丘南側で厚さ1mの飛砂が堆積(Ia)したが、あまり旧砂丘面の変貌は著しくなく、古墳終末期から平安期にかけてのクロスナbの形成があるような砂丘の安定期を再びむかえた。しかし平安期以後風食・雨食がかなり著しくなり、旧砂丘の稜線部が侵食され、その飛砂はクロスナb層の上の暗色土としてあるいは、黄色砂(IIa)として、旧砂丘南側で1~2mの厚さの堆積を形成するていどに進行した。しかし鎌倉期に入る頃一時に、植生が茂り、砂丘がやや固定されてクロスナcを形成した。しかし広大な遺跡地の範囲ではクロスナb面上に砂はほとんど堆積しないままであった。そして海抜6m内外の平坦地が五輪墓の墓地として利用され続けた。

その後近世に入ると本地区でかなり大きな環境の変貌があったらしい。第1は第8図にみられるクロスナc面の人工的削平のような砂丘地の開発があった。第2には、1737~41年頃本地区のすぐ西側に天神川の流路が付け替えられたことがあげられる。この大工事によってそれまで海の方から絶えず供給されていた砂丘砂が供給されなくなり、砂丘の開発と相俟って、著しい侵食が行なわれ、クロスナもかなり広い面積にわたって消失した。またその後北方からの飛砂量が増大し、新砂丘の形成が活発に行なわれた。このようにして、弥生時代から中世まで、かなり安定していた砂丘地帯が近世に入って、荒廃し大きく変化したと思われる所以である。しかし江戸時代後期嘉永年間に入ると開発の時代に入り、新川や浜の新田集落が形成され、防風林の造成や浜井戸の掘削なども行なわれ、飛砂の猛威も次第におさまったと考えられる。

### 参考文献

- 遠藤 邦彦 (1968) 日本における沖積世の砂丘の形成について  
日本地理学会秋季大会研究報告要旨、6—7

(20ページへ続く)

## B. 長瀬高浜遺跡とその周辺の地質（中間報告）

赤木三郎

### まえがき

天神川流域下水道処理場建設地の砂丘下に、人類遺跡を包含するクロズナ層が発達することが確認され、発掘調査がすすめられているが、クロズナ層の発達は地質学的にみても、おおいに注目に値するものである。筆者等は1978年以来、鳥取県下の砂丘地のクロズナ層の調査を実施しているので発掘調査に併行して長瀬高浜遺跡とその周辺の地質調査を実施している。ここでは、調査結果の中間報告をおこなった。なお、鳥取大学教育学部卒業研究として長瀬高浜遺跡を調査した福井ひとみ氏の資料の一部を引用した。これは別に公表予定であるが、明記して感謝の意を表する。

### 地質の概要

長瀬高浜は北条砂丘の東端に位置するが、現在は天神川によって分断され、天神川右岸に独立して存在する。その高度は3m～15mの小起伏の砂丘地で、砂丘砂は未固結で、新・旧砂丘に細分されるが両者の間にクロズナ層が発達している。この砂丘地の内側には潟湖ないしは旧天神川に由来する低湿地が発達する。砂丘の下に発達するシルト質粘土を夾在する砂層は15m強の層厚で、貝殻を混入することから繩文海進時の浸水地域であり、天神川の送流した土砂によって埋積されたものであることがわかる。

長瀬高浜の下水道施設南東端の標高-9～-10m（地面より12～13m）の砂層中から採集された貝化石（文化課森田純一文化財主事より提供）はイワガキ、マガキ、ヤマトシジミ、バカガイおよびサルボウガイで、潮間帯下の-10m土で、汽水域に近い砂泥底に生息したものであることを示している。このほか、掘り上げられたシルト混り砂層中の貝化石はイヨスダレ、ネズミノテガイ、アカニシ、マクラガイ、ツメタガイ、シドロガイ、ヒメコザラガイ、キサゴ、テングニシ、カズラガイ、ハナツメタ、バイなどで、フジツボ、カシバンウニなどである。これらの化石が示す環境は内湾の-10m前後の砂泥底であったと推定される。

沖積層の下には標準貫入試験のN値が50以上で、中砂～粗砂や、シルト質砂からなる洪積層が-21m付近より以深に発達するが詳細はまだわかっていない。

長瀬高浜に最も近距離で露出している基盤岩は江北浜（遺跡の西南西約500m）に見られる鮮新世火山岩類の坂本安山岩熔岩である。本岩は強く風化しているが、同質の風化岩片は長瀬高浜の砂丘地でも散在しているのが見られることから、砂丘下の浅所に本岩類が潜在しているものと考えられる。

### クロズナ層

発掘作業により砂丘下にクロズナ層が広く分布することが確認されたが、クロズナ層は産状、分布などからクロズナⅠ層、クロズナⅡ層、クロズナⅢ層の三層に細分できることがわかった。第1表にクロズナⅠ・Ⅱ・Ⅲの各層の比較を示す。長瀬高浜に発達するクロズナ層

は山陰海岸の砂丘地でみられるクロズナと多くの点で一致し、同一時期に、ほぼ似た環境下で形成したものであることがわかるが、クロズナⅠ層が、もっとも一般的で普遍的にみられるクロズナ層である。

クロズナⅠ層は5m～10mの高度で、現砂丘表面の起伏より平坦な、緩く北傾斜した地形をしているが、南端は急に高度が低くなり、かつ侵食されていて原地形がはっきりしない。

クロズナⅡ層、クロズナⅢ層は、薄い砂丘をはさみ、クロズナⅠ層の発達する砂丘の南側の低地に発達するが、クロズナⅡ層はやや粗粒な部分があり、また、西方で砂質シルト層に転化し尖滅する。

#### クロズナの粒度組成

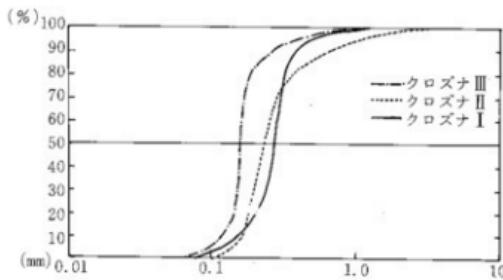
クロズナを粒度分析し、累積頻度曲線で示した(第10図)。クロズナと新砂丘砂との比較ではクロズナにやや細粒のものが多い程度で他の点では極めてよく似たものであることがわかった。クロズナは砂丘砂を母材とし、腐植を多く含むだけのものであることを示している。クロズナⅠ・Ⅱ・Ⅲの比較では、クロズナⅡの粒径中央値(Md)は0.62で、他より粗粒であり、直度(SK)は正で風成と考えられるが、粒度構成が他と大きく異なることがわかる。

#### クロズナ中の植物珪酸体

植物の細胞組織を充填する非晶質含水珪酸を植物珪酸体(Plant opal)という。その大きさは50μ前後であるが、土壤の構成粒子として重要で

第1表 長瀬高浜砂丘中のクロズナの比較

	クロズナⅠ	クロズナⅡ	クロズナⅢ
平均高度	5～10m	3～5m	4～6m
色調	7.5 YR2/3	7.5 YR2/3	7.5 YR3/3
硬さ	半固結	未固結	未固結
層厚	100～50cm	40～50cm	15～50cm
発達度	広範囲	小範囲	小範囲
粒度	Md 0.398	0.620	0.430
直度	Sd 1.23	1.11	
分	K 0.284	0.118	0.903
析	Sk +0.009	+0.232	0.018
生痕化石	外生痕	—	—
植物珪酸体	含まれる。	含まれる。	含まれる。
人類遺跡	弥生前期 古墳時代	平安時代 鎌倉時代	室町時代 江戸時代
強熱減量	12.6%	2.3%	1.2%
重鉱物	Magnetite % 16	Magnetite % 10	Magnetite % 18



第10図 クロズナの累積頻度曲線

あるばかりでなく、その組成比が植物の種類によって異なるので、形態的に分類され、古環境推定の一助とされている。クロズナを所定の方法で処理し、検出した結果、第11図のような植物珪酸体が多数識別できた。

これらは、食パン型、棒状型と呼ばれるものが多く、撲型、分銅型、平板型などと類型化されるものも見出された。しかし、一般にクロボク中に多く見られるササ型珪酸体は、きわめて少なくまゆ型珪酸体は全く見出されなかった。これらの珪酸体の供給植物を今の段階で予測することはできないが、クロボク地の植生と異なるものであろうことは予想される。今後は電子顕微鏡による観察を計画している。

#### クロズナ中の生痕

発掘調査のため除去された砂丘砂の下のクロズナ表面におびただしい数の円形の斑紋が見られた。これらは生痕であると判断し調査をすすめている。地質時代の動物のはった跡や、巣穴、食事の跡、足跡、糞などを総称して生痕 (Lebenspuren) と呼ぶ。生痕は地層境界面や地層中にも残っていて、広義の化石のなかに含まれるものであり、地層形成当時の動物の生活状況、ひいては環境を指示するものとして重要である。普通には水成、とくに海成層に多く見られ、潮間帯に普通に見られるものである。陸成層に見られることは少なく、砂丘層のクロズナ中に発見された報告例はないようである。

長瀬高浜のクロズナ I 層の表面にみられた生痕は直径は 1~2 cm、深さは 2~8 cm で、先端が少し曲った L 字型のものもある。(第12図、第13図) その数はクロズナ I 層分布地の南端で 1 m<sup>2</sup> 内に約 60 個で、北に向って増加するように見られた。

クロズナの表面に直角に入るもののほか、クロズナ面に並行に細長く発達するものが見られた。なお、前者にもクロズナ層表面から生痕が凸状に突出したものと、生痕内に白砂がつまたものがあるが、後者が圧倒的に多かった。これらの生痕をつくる生物を現生の動物で考えると、可能性のあるものとしてクモ、コガネムシ、カニ、トビムシ、オカダンゴムシ、ハマダンゴムシ、エビ、カイコノウジバエなどがあげられるが、比高 5~10 m、海岸線から現在約 1 km の内陸側であること、生痕の大きさなどから考えてコメツキガニとハマダンゴムシの可能性があるが、今後の問題として残したい。

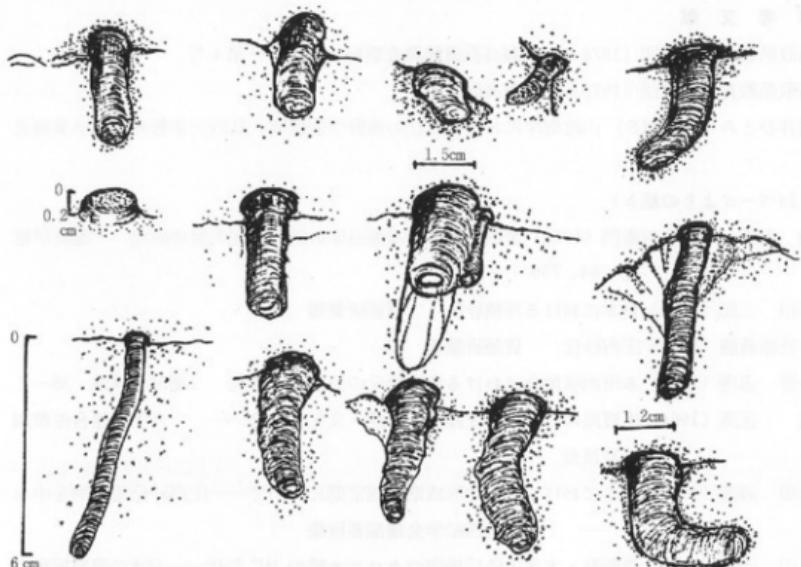
なお、1 号古墳の周溝部の断面にクロズナ面に並行して径約 5 cm に達する多数の不規則にのびるパイプ状構造が発達しているのが認められたが、これらはネズミやモグラのような小動物がつくった生痕の可能性がある。生痕をつくった生物がわかれれば、その生態からも環境が推定できるので引き続き研究をすすめている。

#### まとめと今後の問題

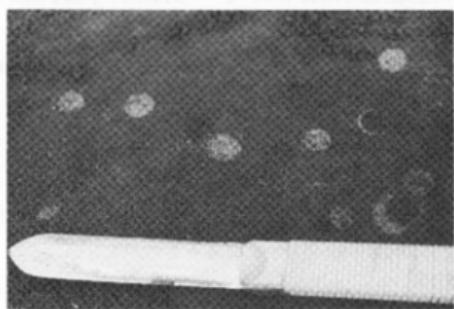
長瀬高浜砂丘の下に埋没しているクロズナ層は、沖積世の堆積物で、砂丘砂に多量の腐植が混入したもので、長期にわたって砂丘が固定し、地表面には植物が繁茂し、小植物も多数



第11図 クロズナ中の植物珪酸体の形態による分類 (福井ひとみ原図)



第12図 クロズナ中の生痕断面スケッチ（福井ひとみ原図）



第13図 クロズナ表面にみられる生痕写真

生息できるような環境でつくられたことがわかる。このような環境が弥生前期から断続的ではあるが、室町時代頃まで続いていることは、気候の変化、海岸線の低下、植生の発達などを考えずには説明できない。少なくも現在より、海岸近くまで植生が拡がっていたし、砂丘の砂はやや湿润

であり、気候もいく分冷涼であったと考えたい。今後はクロズナの特性を明らかにするとともに、生成環境を考察し、クロズナの形成は長瀬高浜の一地方的な現象でなく、同一時期により広範に見られる地質学上の自然現象と考え、他地域との対比をすすめる必要があると考える。

## 参考文献

鳥取県教育文化財団（1978 a）長瀬高浜遺跡調査概況、第1号～第4号

鳥取県教育文化財団（1978 b）長瀬高浜遺跡1

福井ひとみ（1979 MS）山陰海岸における砂丘の地質学的研究、鳥取大学教育学部卒業論文

（14ページよりの続き）

藤 則雄・尾崎金右衛門（1958）金沢市近郊日本海沿岸の沖積世泥炭層の研究 地質学雑誌 64、756

川田 一郎（1946）日本における埋積砂丘 資源研彙報 10

小笠原義務（1946）庄内砂丘 資源研彙報 10

小野 忠濃（1963）本州西端地方における海岸砂丘の形成期の研究 地理学評論 36—7

式 正英（1964）佐渡島の自然 佐渡——自然・文化・社会—— 九学会連合佐渡調査委員会

角田 清美（1975）日本における砂丘の形成期と固定期について——庄内砂丘地の例を中心 に—— 日本第四紀学会講演要旨集

角田 清美（1978）島根県・太平山砂丘地内のクロスナ層の<sup>14</sup>C年代——日本の第四紀層の<sup>14</sup>C年代（121）—— 地球科学 32—1

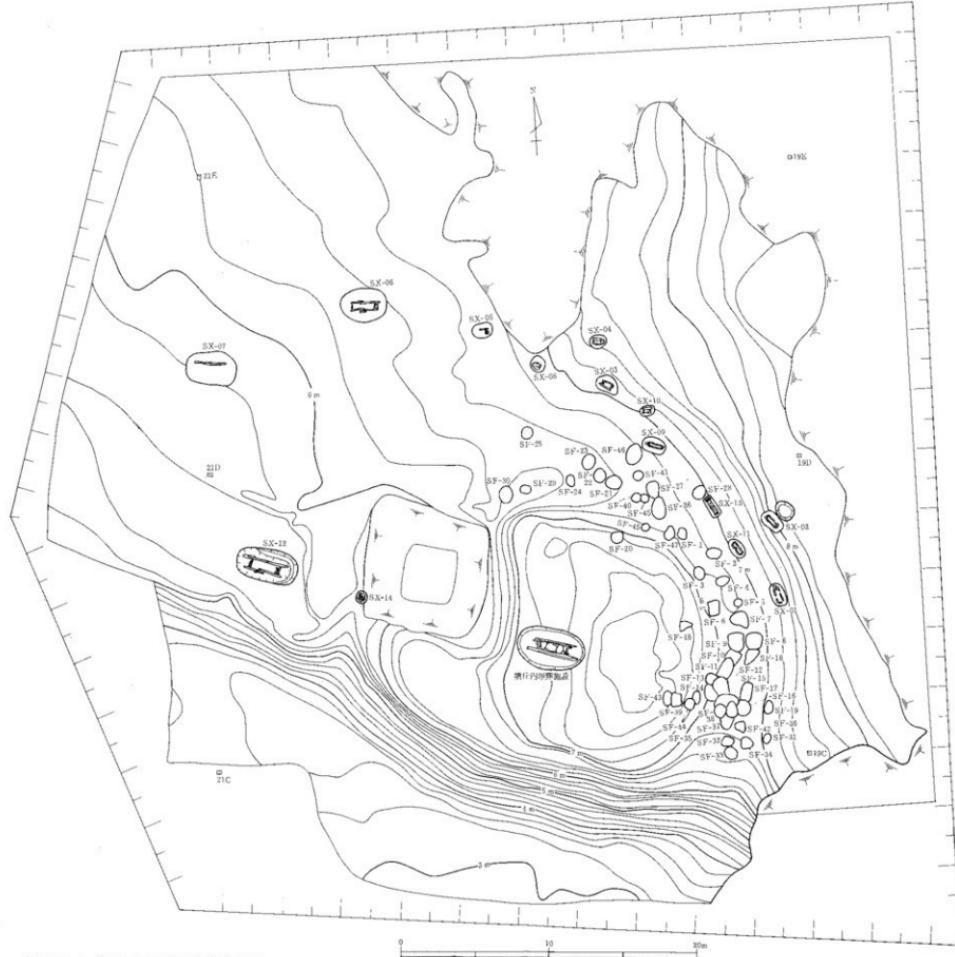
豊島吉則・赤木三郎（1964）気高町宝木高浜砂丘の形成について 鳥取大学学芸学部研究報告（自然科学） 15

豊島吉則・赤木三郎（1965）鳥取砂丘の形成について 鳥取大学学芸部研究報告（自然科学） 16—1

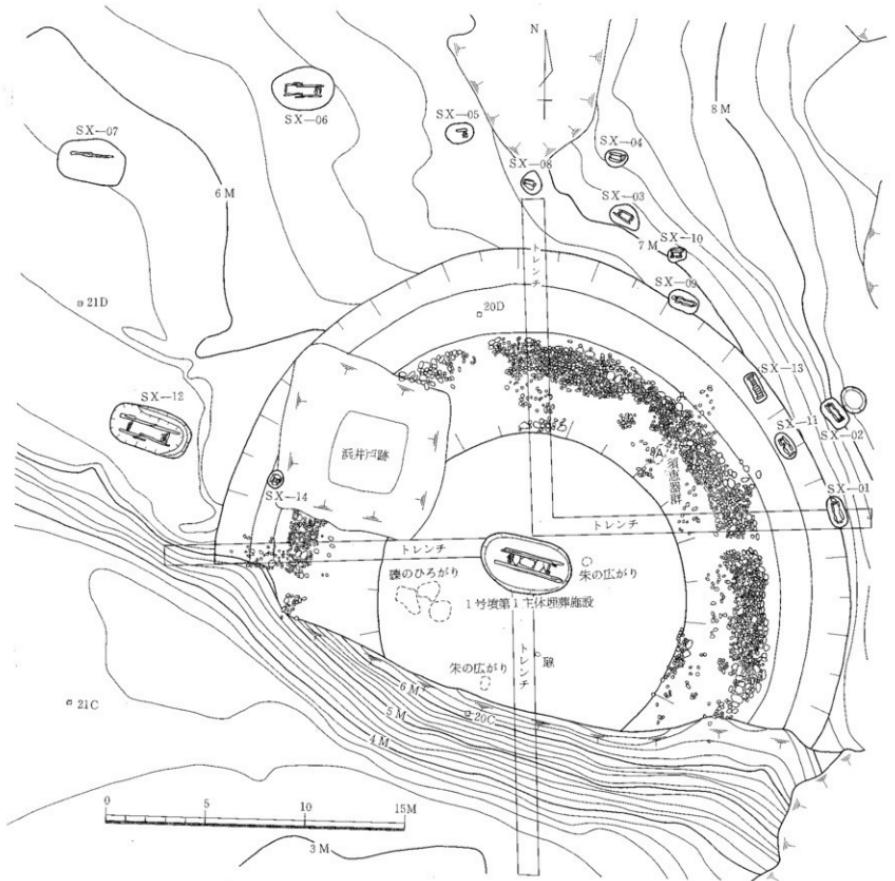
豊島 古則（1975）山陰の海岸砂丘 第四紀研究 14—4

注1

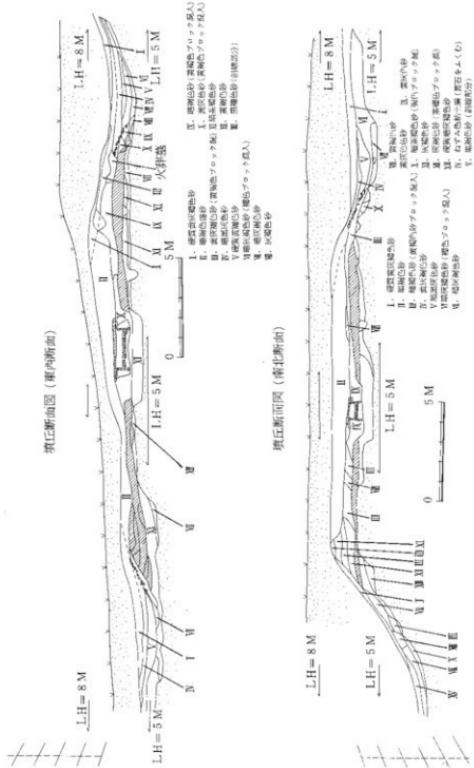
山陰各地のクロスナと遺物に関するこの項は、山本清編（1978）さんいん古代史の周辺（上）山陰中央新報社、によるところが大きい。



第14図 I号墳並びに周辺遺構位置図



第15図 I号墳並びに周辺石棺群位置図



### 3. 1号墳と周辺遺構について

#### (1) 火葬墓

1号墳の東側・北側周溝あたりで48基の火葬墓が検出された。これらはいずれも白砂層下のクロ砂の第一層（黄灰褐色硬質砂）にあるが、各々形状が異なり一様ではない。その規模を概観すると、長軸約1m、短軸約0.8m深さ約0.2mの土壙墓状となっているものが多い。

これらの土壙墓には、明らかに火を受けたと見られる石材、焼灰、骨片、炭片が存在していたので火葬墓と呼称した。

この火葬墓群は、石材を使用しているもの、未使用のものと大きく二つに分類することができる。さらに、石材を使用しているものの中にも単に平面的に石材を配列しただけのものと、底石を敷き側壁を立てるなど、石櫃状に配石したものとが有り、石材未使用の場合でも、土壤の中に炭片・焼灰だけあるものと炭片・骨片の両方とも混入しているものとがある。また、特殊なものとして焼けた人骨のみ埋葬したものがある。そこで、便宜上5つのタイプに分類して下図に示す。

Aタイプ：土壤内に炭片・焼灰混入



第16図 火葬墓写真 (SF-39・43・44) 北方向より望む

Bタイプ：土壌内に炭片・骨片・焼灰混入

Cタイプ：土壌上に平面的配石をしているもの

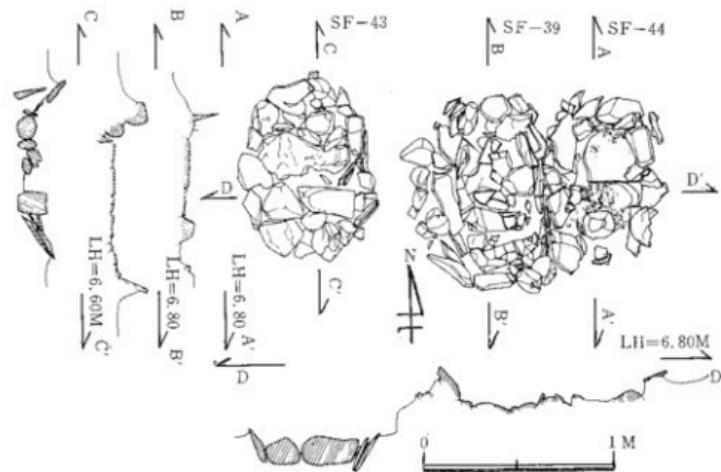
Dタイプ：土壌内に石櫃状配石をしているもの

Eタイプ：骨片のみ

第2表 火葬墓の分類

タイプ別	分類方法	遺構数	遺構名 (SFを省略する)
石材未使用	A 炭片・焼灰混入土壌	4	27、29、31、46
	B 骨片・炭片・焼灰混入土壌	19	2、3、4、9、10、11、12、13、14、15、16、21、24、28、37、38、40、41、45
石材使用	C 平面的配石土壌	15	1、5、7、17、18、20、22、23、25、26、30、32、33、34、42
	D 石櫃状配石土壌	8	6、8、19、35、36、39、43、44
その他	E 骨片のみの土壌	2	47、48
			計48

以上の分類のなかでDタイプのものを詳述すると、SF-6は長軸1m、短軸0.78mで主軸



第17図 火葬墓実測図 (SF-39・43・44) (39・44はウレタン樹脂により遺構移転)

軸方向がNS、SF-19は長軸0.9m、短軸0.65m、主軸方向はN45°E、SF-36は長軸1m、短軸0.95m、主軸方向はNS、SF-39は長軸0.95m、短軸0.7m、主軸方向はNS、SF-43は長軸1m、短軸0.4mで主軸方向はN24°E、SF-44は長軸0.8m、短軸0.7mで主軸方向はNSである。このタイプのものはヘギ石や葺石を再使用し、他のタイプよりもかなり丁寧な石櫃を築成していて、その規則性から何か意図的に構築したものと考えられる。

この火葬墓群の築造時期については、遺構内から遺物は非常に少なく、わずかに古銭（開元通宝、大觀通宝、景德元宝）数枚が検出されたことにより、中世の一時期に集中的にこの辺が墓地として利用されたことが窺える。

各遺構内の人骨の遺存状況はあまり良くないが、それでも、かなりの量の人骨が確認できた。特にDタイプの火葬墓に人骨の遺存状況が良いものが見受けられる。

## (2) 1号墳—その築成方式と埋葬施設について

### イ. 築成方法

1号墳の調査は周溝部に分布する火葬墓群の調査と併行しながら、その周溝部の解明を行うことから始めた。

先ず、第一段階で4本のベルトを填丘に向けて残し、ベルト間の部分を掘り下げ、填丘の北側と東側の周溝部をつかみ（第15図参照）、第二段階で、第一主体部を起点にしてほぼ東西南北方向に4本のトレンチを入れ填丘の築成方法を観察した。

発掘によって明らかとなった1号墳の規模は、周溝部を含めると径33.3m、高さ東で2.4m、北で3m、西で3.5mの円墳であり、古墳の周囲に円礫の葺石が施されていた。葺石の残存状況は、填丘の東側、北側で特に良く残り、基底部の描くラインがほぼ円形に巡っている。



第18図 1号墳遠望写真（填丘調査前東方向より望む）



第19図 1号墳遠望写真（填丘調査後北方向より望む）

北西側は、近代の浜井戸掘り込みのため葺石の大部分が破壊されている。西側では、葺石の一部が残存している。南側では、砂丘の風蝕、雨蝕活動等により墳丘の形が崩れているが、灰色のシルト層中に下落した葺石が多数検出され、この方面にも葺石が施されていたことがわかる。

葺石は、暗褐色の盛砂表面に貼られている。そして、その幅は基底部から高さ約0.8m付近まで旧状を留めている。次に高さ1.3mあたりで比較的大きな円礫が部分的に検出される。このことから、葺石を二段に分けて葺いた可能性も考えられる。

葺石は、安山岩質の円礫が多く使用されている。基底部の葺石は、長軸約40cm、短軸20cmと比較的大きく、その他は幼児頭大の葺石が多い。

角礫等も使用されているがその量は少ない。これらの円礫は河原石と考えられるが、到底天神川下流辺から運搬されて来たものとは考えられず、天神川中流辺から搬出したものと考えられる。

1号墳の砂層を第15図、第21~24図によって説明する。なお、この古墳は墳頂部が風蝕、耕作等による攪乱を受けているため、墳頂部付近の砂層堆積状況については不明の部分が多い。

さて、1号墳の築成方法についてであるが、このあたりはクロ砂の形成する平坦な丘陵地で、その南側はクロ砂層が急速に落ち込んでおり、この古墳は丘陵の尖端に築成されたことになる。1号墳の区画は、周溝部を掘り上げ、墳丘部を盛砂している。

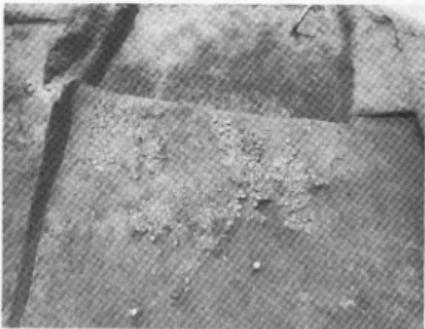
地山は黒褐色砂層で、東側が西側より0.6mほど高くなっている。このため、周溝底部の高さも東側の方が西側より1.1m程高くなっている。

盛砂は、旧地表面の黒褐色砂上に暗褐色砂を数層盛っている。特に第一埋葬施設付近では、灰白色の白砂を盛り、その上を暗褐色砂層で覆っている。

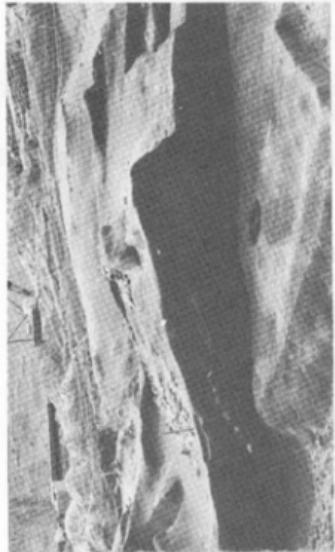
#### ロ. 1号墳の埋葬施設について

墳丘内で埋葬施設を一基確認した。この埋葬施設は1号墳のほぼ中央部に位置する組合式箱式石棺である。

この箱式石棺の内法は、遺骸面で長さ1.85m、幅0.61m、蓋石より深さ0.3mを測り、



1号 塗 断面図



第21図 塗丘東側断面写真（北方向より望む）



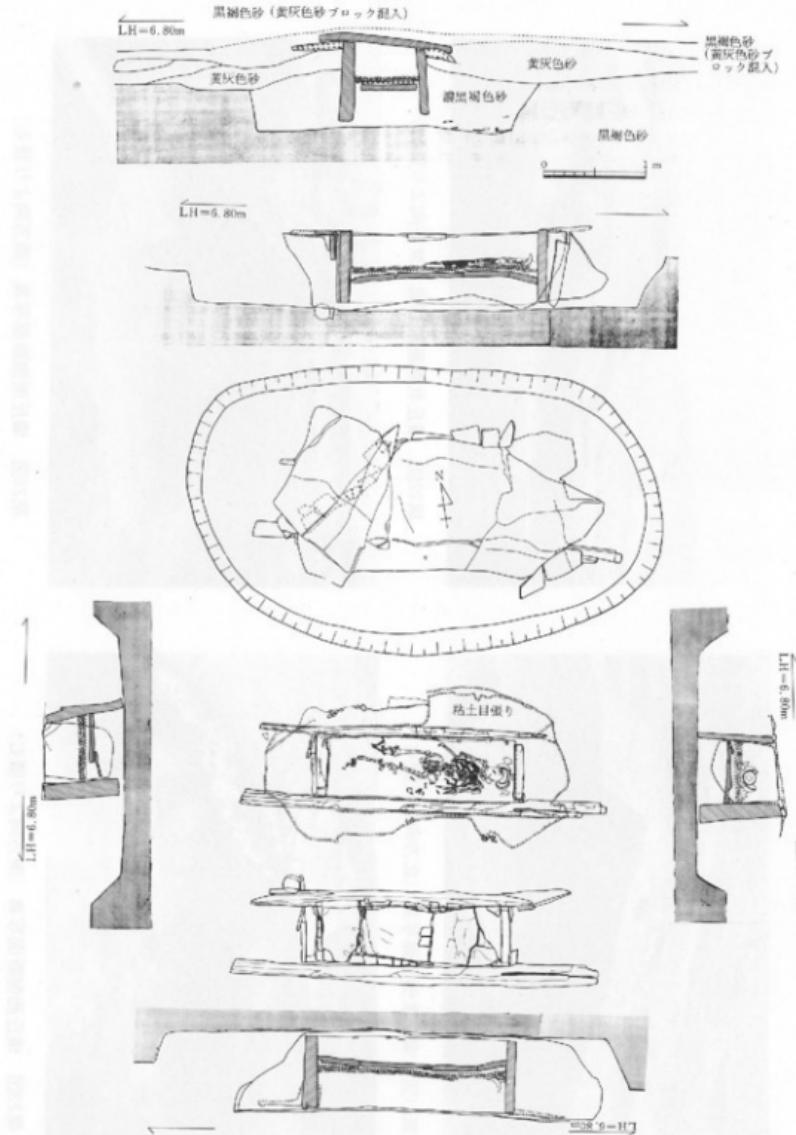
第22図 塗丘北側断面写真（東方向より望む）



第23図 塗丘西側断面写真（南方向より望む）



第24図 塗丘南側断面写真（西方向より望む）



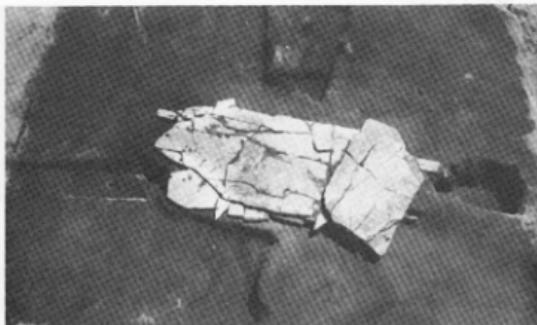
第25図 1号墳墳丘内埋葬施設展開図

石棺の主軸は、N  
107° Eである。

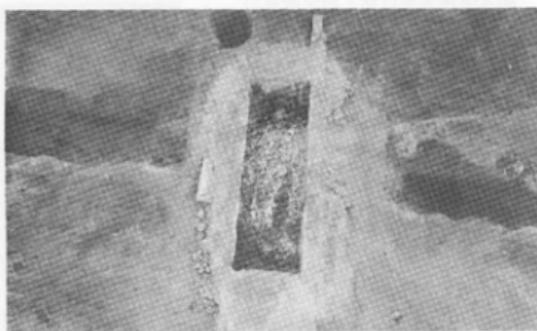
墓壙掘り方は、  
旧地表面の黒褐色  
砂を掘り込みその  
規模は長軸4.5m、  
短軸3m、深さ0.4  
mで梢円型を呈し  
ている。

蓋石は石材2枚  
からなり、その大  
きさは、長軸2.34  
m、短軸1.04m、厚  
さ0.08mと、長軸  
0.98m、短軸0.72  
m、厚さ0.06mであ  
る。

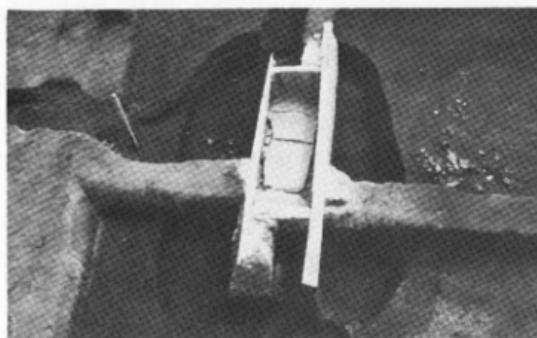
側壁の規模は、  
南側側壁で、長軸  
3.58m、短軸0.8m、  
厚さ0.11m、北側  
側壁で長軸3.2m、  
短軸0.8m、厚さ  
0.1mを測り、小口  
石は、東西とも數  
枚重ねて使用し、  
東側で長軸0.72m、  
短軸0.52m、厚さ  
0.1m、西側で長軸  
0.72m、短軸0.53  
m、厚さ0.15mを測  
る。この他にも數  
枚の石材を棺外に



第26図 墳丘内埋葬施設開蓋前写真（北方向より望む）



第27図 墳丘内埋葬施設検出状況写真（西方向より望む）



第28図 墳丘内埋葬施設調査終了後写真

敷いている。

石棺内の底砂はほとんどなく、東側を頭にした仰臥伸展の人骨が良好な遺存状態で検出された。

遺物は、人骨の頭部付近東側壁寄りに高环3個体(枕として使用)、北側壁面に付着した形で鉄刀一口、人骨頭部に竹製桶1が検出された。

遺骸は疊床の上に置かれ、頭骨のみ朱色に塗られていた。京都大学理学部自然人類学教室の池田次郎教授の鑑定によるならば、推定年齢25~40歳の女性の人骨であるとのことであった。

疊床は、数枚底石を並べた上に赤色顔料を塗布した粘土を張り、その上に小礫を敷きつめたもので、その厚さは平均5cmである。

この箱式石棺の構築過程は、墓壙底に側壁を立て、側壁内外

に黒褐色砂を埋め込んだ後底石を敷き、遺骸を埋葬してから棺外に白砂を盛り、その上に小礫を並べた後蓋石で覆ったものと考えられる。

埋葬施設第一主体より3m程離ったところで小礫の広がりを確認した。(第29図) この礫の広がりは、レベル的には第一埋葬施設築成面と同じで、第二埋葬施設が存在した場所とも考えられなくはないが、骨片・副葬品類、木片もなく如何ともい難い。



第29図 墳丘内埋葬施設頭骨周辺写真



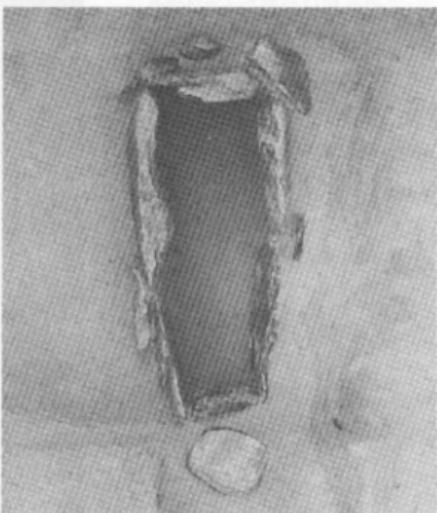
第30図 墳丘内埋葬施設直刀写真

(3) 1号墳周辺石棺群

イ. SX-01 (箱式石棺)

この石棺はクロ砂上面より40cmほど下で検出され、周溝の肩部に位置している。層位的にはクロ砂と白砂とにまたがって位置しており、出土遺物は大臼歯2本、門歯2本、土玉1点出土した。

歯については鑑定の結果幼児であるとのことである。

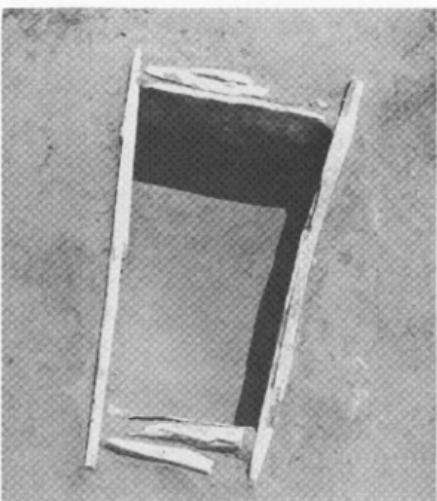


第31図 SX-01箱式石棺写真

ロ. SX-03 (箱式石棺)

この石棺は古墳の周溝肩部に位置しており、石棺は黄灰色砂中に埋められている。石材は薄手の安山岩を使用している。

棺内で乳歯を5本確認した。これらは鑑定の結果、2~3歳の幼児のものと判明した。

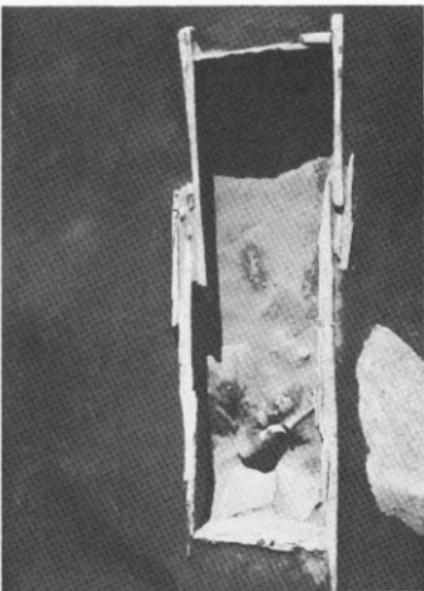


第32図 SX-03箱式石棺写真

#### ハ. SX-06 (箱式石棺)

この石棺は長軸が1m74cmあり、SX-12に次ぐ大きさである。石棺内部では、頭骨、歯、大腿骨、腕骨を検出した。この遺骸面に少量の粘土が敷きつめてあった。

鑑定によると30歳前後の男性の遺骸であるとのことである。



第33図 SX-6 箱式石棺写真

#### ニ. SX-13 (埴輪円筒棺)

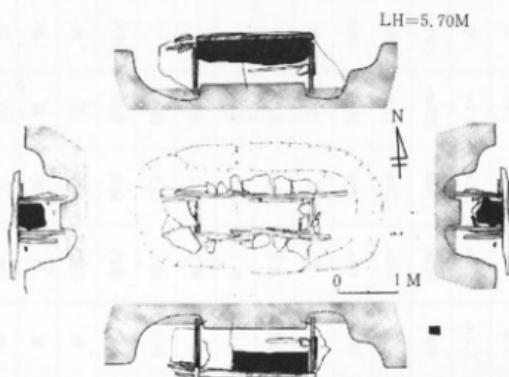
この棺は円筒埴輪を2本、口縁部を向かい合わせに使用している。円型の透孔には他の埴輪の破片で覆っている。小口に相当する部分には他の石棺に多く使用している安山岩を当てている。

棺内では左下頬骨と歯が数点検出された。池田教授の鑑定は受けていないが幼児骨の可能性が強い。



第34図 SX-13埴輪円筒棺写真

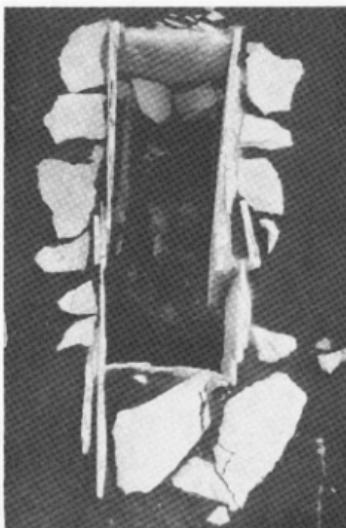
ホ. SX-12 (箱式石棺)



第35図 SX-12箱式石棺実測図

この石棺は古墳の西側に位置しておおり、層位的には石棺そのものがクロ砂に包含されている。そのため掘り方の検出に困難を極めた東小口の内側にV字状石枕が置かれており、それらは一枚の石を割って作られていた。東西の小口の北壁、南壁内部には赤色顔料が塗布しており、V字状枕下方に5cm程度の厚さを持った粘質の砂が敷かれていた。

この面で棺内遺物として人骨、直刀1・鉄劍1、鉄鎌5点が検出された。



第36図 SX-12箱式石棺写真

第3表 1号場周辺箱式石棺計数表

種 式	SX-01	SX-02	SX-03	SX-04	SX-05	SX-06	SX-07	SX-08	SX-09	SX-10	SX-11	SX-12	SX-13	SX-14
	箱式石棺	箱式石棺	箱式石棺	箱式石棺	箱式石棺	箱式石棺	箱式石棺	箱式石棺	箱式石棺	箱式石棺	箱式石棺	箱式石棺	箱式石棺	箱式石棺
蓋石枚数	10枚	1枚	1枚	1枚	破壊のため不明	1枚	破壊のため不明	1枚	破壊のため不明	1枚	破壊のため不明	1枚	1枚	無
蓋石長さ (平ら)	1.3m	1.0m	0.9m	0.7m	0.7m	2.2m	2.2m	1.2m	0.7m	1.0m	1.0m	1.0m	1.0m	無
石棺長軸	84cm	92cm	62cm	46cm	46cm	174cm	174cm	93cm	69cm	76cm	185cm	196cm	196cm	56cm
石棺短軸	22cm	26cm	33cm	20cm	破壊のため不明	42cm	破壊のため不明	36cm	21cm	20cm	22cm	53cm	36cm	48cm
深さ	26mm	24cm	34cm	30cm	22cm	42cm	不明	10cm	18cm	18cm	19cm	58cm	26cm	30cm
V字石枕	無	有	無	有	有	無	無	無	無	無	無	有	無	無
側壁枚数	東2	東3	北1	北1	北2	北1	北1	北1	北2	北2	東2	北2	東2	東5
側壁方向	西2	西2	南1	南1	南1	南1	南1	南1	南1	南1	西3	南2	西2	西1
小口枚数	北1	北2	東2	東1	東1	東1	東1	東1	東1	東1	東1	東1	東1	北1
小口枚数	南1	南1	西3	西1	西1	西1	西1	西1	西1	西1	西1	西1	西1	南1
工軸方向	西北	西北	東西	東西	東西	東西	東西	東西	東西	東西	南北	東西	東西	東西
赤色顔料	無	無	無	無	無	有	無	無	無	無	無	有	無	無
粘土日張	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無
通仔人骨	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無
副葬品	土玉	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無
被葬者年齢	幼兒	13歳前後	不明	不明	男	30歳前後	性不明	不明	不明	不明	幼児	不明	成人	不明
石	村	安山岩	安山岩	安山岩	安山岩	安山岩	安山岩	安山岩	安山岩	安山岩	安山岩	安山岩	安山岩	安山岩

(4) 1号墳並びに周辺遺構出土遺物

1号墳クロ砂面で土師器大型甕片、小型丸底壺を含む土器群、高杯等の土器を伴った赤色顔料の広がり、また須恵器碎片を検出した。これらは、1号墳の盛り砂を施す前に何らかの儀式を行った時の遺物とも考えられる。

墳頂部では須恵器群を検出した。(第37図A地点)須恵器の器形は有蓋高杯・高杯等であり、その形式は山本清氏の「山陰須恵器編年」の第Ⅰ期に比定されるものと考えられる。また、これと同期と推定される須恵器片(器台)が1号墳北東部の高まり上で検出された。前者の須恵器群は封土上で出土しており、1号墳築成後の供献土器と考えられ、後者の器台も同様の意味を持つものと考えられる。

この他にも、1号墳周溝肩部で



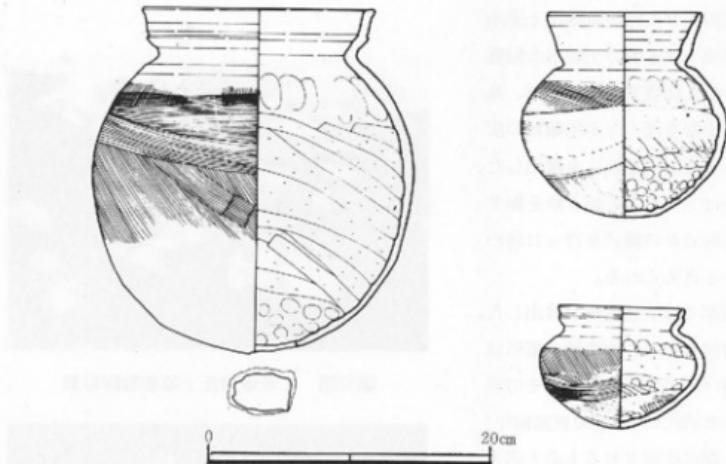
第37図 1号墳墳丘上須恵器群写真



第38図 1号墳墳丘内出土甕写真



第39図 1号墳周溝内出土土師器写真



第40図 1号墳周溝内出土土師器実測図

数点の完形土器を検出した。SX-01周辺で埋（須恵器）1点、SX-13周辺で壺2点、甕1点を検出した。(第39図、40図)これらは、1号墳か周辺石棺群のいずれかに伴う供献土器と考えられる。

#### (5) まとめ

以上、1号墳の築成方法、埋葬施設、周辺石棺群について述べてきたが、ここで、1号墳と周辺石棺群との相互関係、1号墳の築成時期について触れてみたい。

先ず、1号墳と周辺石棺群との相互関係については、結論として、1号墳築成後あまり隔たらない時期に埋葬したものであると思われる。周溝内、あるいは周溝肩部に埋葬したこれらの大小箱式石棺群は、1号墳に伴ったものであり、1号墳内の被葬者を盟主とした一豪族の墓地ということができよう。

次に、1号墳並びに周辺石棺群の築成時期については、まだ調査中であって、その時期を明確に断定することはできないが、一応古墳時代中期後半頃に築造されたものと考えたい。

最後に、最近の調査状況を附言すると、1号墳築成前の遺構として方形の竪穴住居跡状遺構5棟、掘立柱建物跡状遺構2棟、その他土括等が相次いで検出された。

従来、砂丘地には住居は構築し難いものであると考えがちであったわけであるが、この遺構群検出を機に古代人の砂丘地での生活様式が明らかになっていくものと思われる。

#### 4. 弥生時代の合口土器棺墓について

17—G区画内のクロ砂層と白砂層との境界線付近で、弥生時代の合口土器棺墓が1基検出された。

その出土地は、クロ砂層が薄くなりながら消滅し、その下盤である黄褐色砂層が黄灰色砂層へと漸進的に移行していく地点である。

さらに、この地点は標高11m40cmであり、長瀬高浜遺跡の遺物包含層の中でも最高地点に位置している。

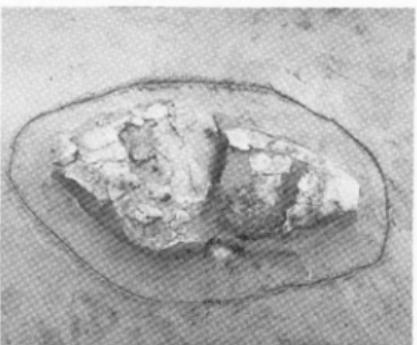
この合口土器棺墓は、黄灰色砂中にほぼ水平に埋置され、上部は甕、下部は壺からなる。その規模は長軸1.68m、短軸上部で0.62m、下部で0.91mである。その掘り方の規模は長軸方向2.1m、短軸方向1.57m、深さ1.01mである。合口土器棺墓の長軸方向はN23°Eである。

それぞれの土器については整理中であるがその特長を若干述べると、甕は口縁が「く」の字形に外反し、肩部に列点文が加えられている。器形は胴部にややふくらみがある。

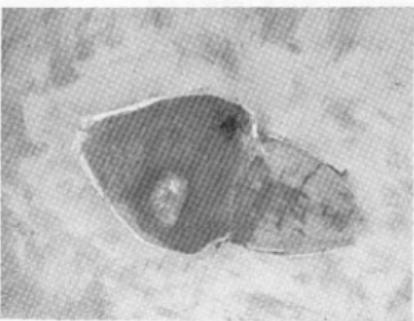
壺は、口縁部が検出された時点からなく、埋葬時にうち欠かれたものと考えられる。また検出時、胴部下に穿孔がみられた。壺の肩部に籠描き平行沈線文が五条施されている。器形は胴の張りが強く重心が高く、倒卵形に近い。また底部の側面は垂直に近い。



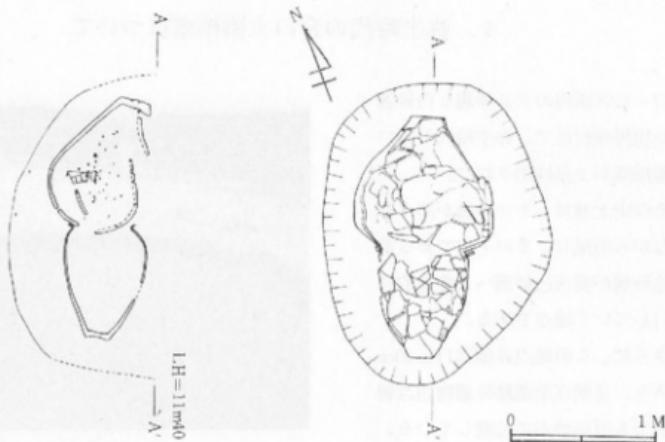
第41図 合口土器棺墓出土地遠望写真



第42図 合口土器棺墓出土状況写真



第43図 合口土器棺墓調査状況写真



第44図 合口土器棺墓出土状況実測図

甕・壺とも煤がかなり付着している。

棺内では、径2.5mm、長さ平均5mm、管内径1.25mm（平均値を示す）の碧玉製管玉が41個検出された。

人骨は、頭骨の一部、歯冠数本が下部の壺内を中心として検出された。上部の甕内では人骨の破片がわずかに遺存していただけである。人骨の鑑定結果はまだ判明していないが幼児埋葬用の土器棺墓と推察される。

この遺構の築成時期は、土器形式から推定すると、弥生時代前期後半と考えられる。

なお、この合口土器棺墓は旧松林地内に位置していたため、耕作等による破壊から偶然免れたものであるが、他地域での群をなした集中的な

出土状況を考えると、今後の調査でまだまだ発見される可能性があり、クロ砂層最下層の遺構として注意を喚起する必要があろう。



第45図 甕 写 真



第46図 壺 写 真

## 5. 東部地区遺構について

### (1) 概 観

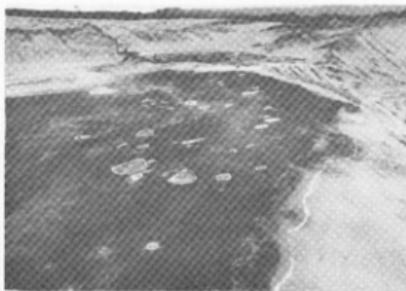
昭和52年度実施の遺跡確認調査において、クロ砂のひろがりを大まかに知ることができた。それは、東は11ラインまで、北はKラインまで、南はDラインまでである。

ここで東部地区とは、一応18ラインより東側を示すものとする。

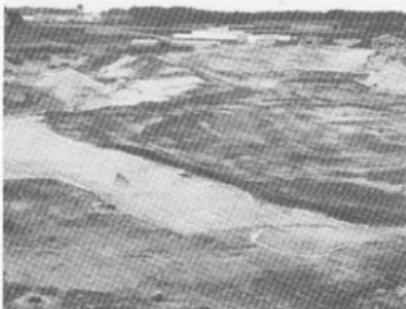
昭和53年度の東部地区的調査は、クロ砂の面的なひろがりを知ること、その地下に内蔵する遺構有無の確認調査を行った。第50図のようにクロ砂のひろがりは工事計画予定内に広くひろがる。

その地形は、スリ鉢状の凹面をなし、その中に古墳の墳丘が小山のように点在する。

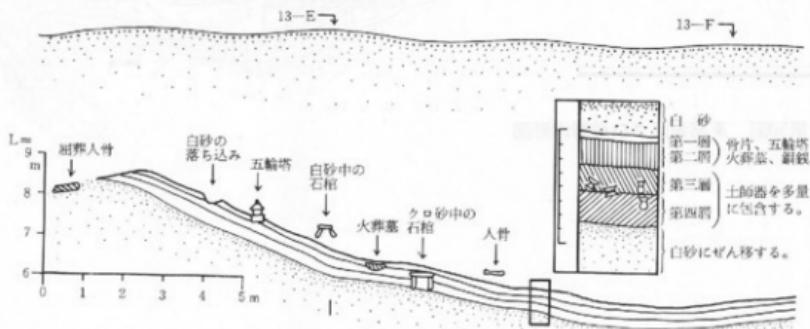
調査の方法は、工事の進行具合の関係から、11ラインと14ラインの間の地区を優先的に発掘することになった。



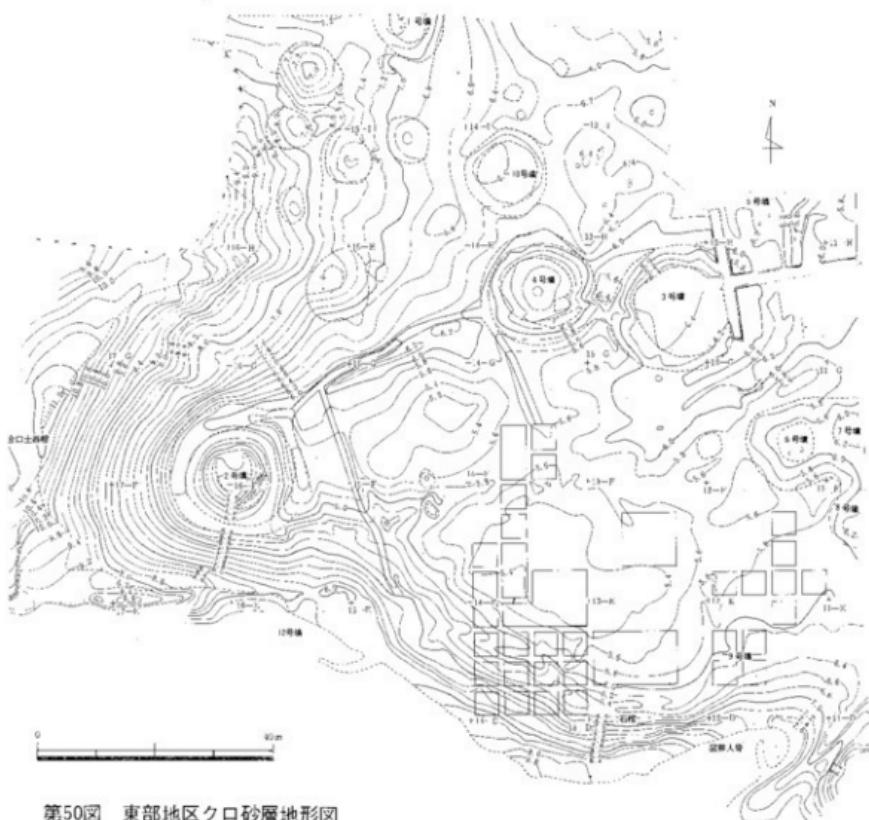
第47図 東部地区遠望（西方より望む）



第48図 東部地区遠望（南東より望む）



第49図 東部地区砂層模式図



第50図 東部地区 クロ砂層地形図

現在確認している遺構は、大きく白砂中検出のものと、クロ砂中検出のものに分けられる。

白砂中検出のものには、石棺・人骨・五輪塔などがあり、クロ砂中検出のものには、古墳・土壙群・火葬墓・五輪塔群・土器群・溝状遺構などが上げられる。

層位的な把握は非常に困難であるが、第50図のように大きく4層にわけられる。

第1層は青灰褐色をしており、生痕が多い量にみられる層で出土遺物は細片の土師器が少量出土するくらいである。

第2層は赤灰褐色をしており、出土遺物としては銅鏡などが出土する層である。

第3層は黒灰褐色をしており多量の土師器を出土する。

第4層以下は漸次白砂に移行する。

## (2) 白砂中石棺 (第51図)

この石棺は、青灰褐色のクロ砂の上面、約20cmの高さで、白砂を取りのぞく作業中に検出された。

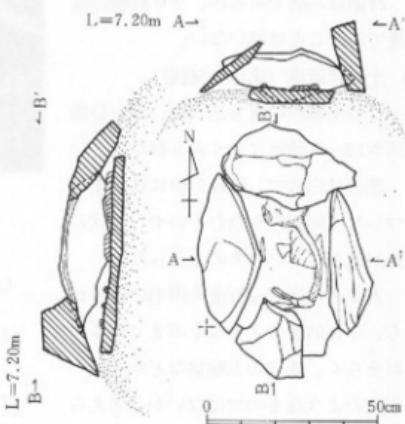
三角形の蓋石をもつ、いわゆる箱式石棺である。

内のりの長さは30×20cm程度の小さなものである。

蓋石を取りのぞくと底石の上に顔面を西方向に向けた横臥屈葬人骨を検出した。



第51図 白砂中石棺写真



第52図 白砂中石棺実測図



第53図 白砂中検出人骨写真

残存していたものは頭骨片、断片数点、脊椎・大軀骨などである。

鑑定によれば幼児人骨であるという。

この石棺の時期については、副葬品などもまったくみられなかつたので、明確な時期はつかめないが、おそらく周辺に散乱する五輪塔の時期と同じくするものであろう。

### (3) 白砂中人骨 (第53図)

#### • 12-F (IIの b)

この人骨は、白砂を排除していく時に検出したもので、大腿骨のように思える。

時期は不明であるが、クロ砂層形成後であることは疑いない。

### (4) 土壌状遺構 (第54~56図)

この土壤状の落ち込みは、12-D地区や13-E地区に多くみられた。

埋砂は白砂で、埋砂の中には、まつした土師器片を含むものや、板状の石が混入していたものもあった。

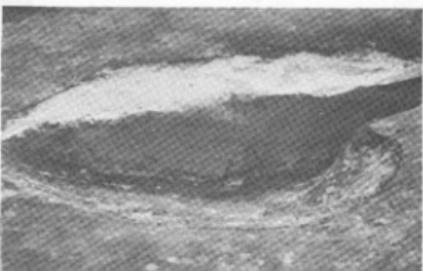
大きさは径50cm程度の円形のものから、1m前後の大きなものまである。おそらく、周辺の五輪塔などから、土壤層のようなものではないかと考えられる。時期については不明であるが、埋砂が白砂であることからクロ砂形成後であることは確かである。

### (5) 五輪塔群 12-E (IIの a) (第57図)

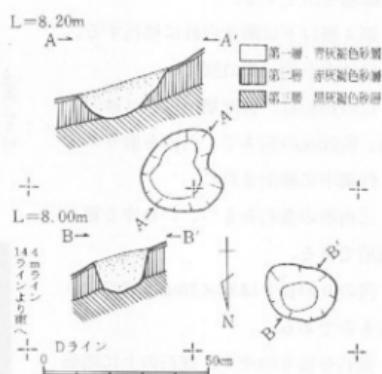
東部地区で見られる五輪塔群は白砂中で検出するものと、クロ砂中で検出されるものがある。すべての五輪塔は正位するような形で検出されること



第54図 土壌状遺構写真①



第55図 土壌状遺構写真②



第56図 土壌状遺構実測図

はなく、各々が散乱するように検出された。時期は室町から安土桃山期のものが多く見られる。

#### (6) 屈葬人骨（第58、59図）

屈葬人骨は13—D地区において白砂を取り除いていく作業中検出された。

クロ砂が南へ漸次移行して消えてしまうラインから1.5m南側の地点である。

体の右を下にした、いわゆる横臥屈葬の状態で検出した。頭骨は右頭頂骨、右後頭骨、右前頭骨、蝶形骨右半分を残す。顎面骨はないが上顎、下顎の歯は遺存する。右上肢を肘で屈げ、手は顎面近くにあったと思われる。

この横臥屈葬には伴出遺物、副葬品がまったく見られないため、時期を決定することは非常に困難である。

そこで周辺のクロ砂の状況や、五輪塔などから考えてみたい。

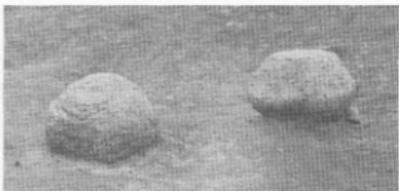
第49図の概念図に見るように屈葬人骨の時期を五輪塔などの時期と考える説、クロ砂が被覆する以前と考える説などがあげられる。

後者の考え方は被覆していたクロ砂が、風蝕や雨蝕などによって浸食されなくなつたとする考え方方に立脚している。

現に17—G地区において、クロ砂が被覆する以前の白砂中から弥生時代前期の合せ口の土器棺が検出されている。

このような事から、この屈葬人骨はクロ砂が被覆する以前の時期としたい。

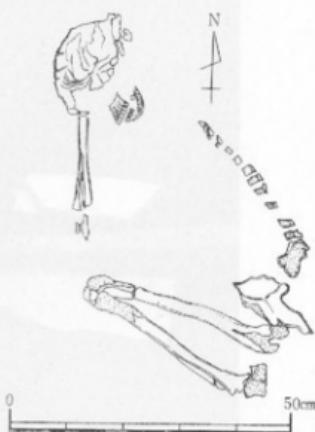
#### (7) 土器群（第62～64図）



第57図 五輪塔出土状況写真



第58図 屈葬人骨写真



第59図 屈葬人骨実測図

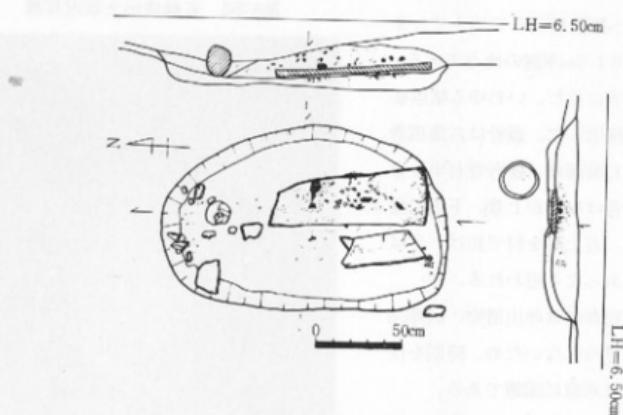
東部地区の第3層下層から第4層にかけて多量の土器が検出される。

多くの土器は平面的に密集して出土するが、土壤状遺構の中から出土するものもある。

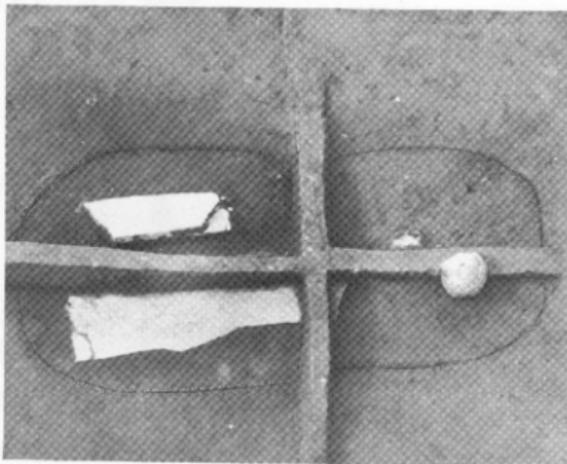
土師器が主であるが、その中に弥生時代前期のものが混入する。

器種としては鼓形器台が多くついで、壺・甕・高杯・低脚杯・瓶などである。

(8) 火葬墓 (13-FのI a)



第60図 東部地区火葬墓実測図



第61図 東部地区火葬墓写真



第62図 土器群出土状況写真①

この火葬墓は13-FのⅠaグリッド内において、赤灰褐色砂から黒灰褐色砂にかけて掘り込まれていた。火葬墓上面で大型の板石が一枚と小型の板石が一枚検出された。この石は火を受けて赤褐色に変色していた。この大型の板石の北側で骨片が密集しているのを確認した。

#### (9) 東部地区のまとめ

東部地区的遺構は大きく次の3つに分けられる。

クロ砂を被覆している白砂層中検出のもの、クロ砂層中検出のもの、クロ砂層下の白砂層検出のものである。

クロ砂を被覆している白砂中で検出のものは、石棺、人骨、五輪塔である。

クロ砂中では第1層～第2層にかけて五輪塔、火葬墓、土壤状遺構、第3層～第4層にかけて2つのタイプの土器群、クロ砂の下の白砂中で屈葬人骨が、それぞれ検出されている。

現在、東部地区ではこの他に住居跡であろうかと思われる遺構も検出されているし、白砂排除の作業中、古墳が数基確認されている。

まだ調査中途で結論を出すのは早計であ



第63図 土器群出土状況写真②



第64図 土器群実測図

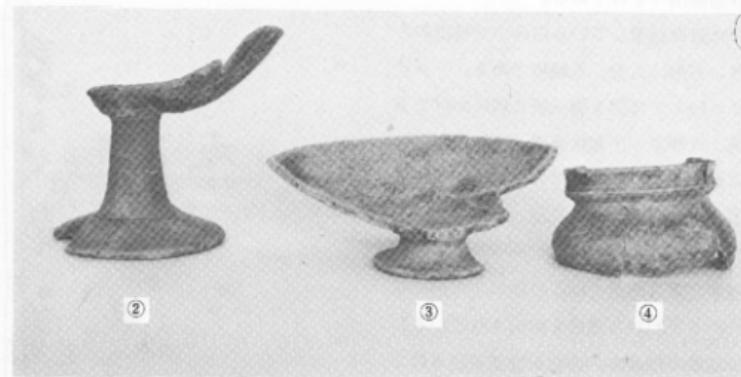
るが、この海岸地帯は、多くは墳墓に利用されていた可能性が強いと思われる。

古墳が数基確認されたことにより、近くに住居跡が検出される可能性は高いが、現在のところはっきり住居跡と言えるものはまだないが、今後の調査でこの海岸地帯での人びとの生活がうかがえるものと期待する。

#### (10) 東部地区遺物



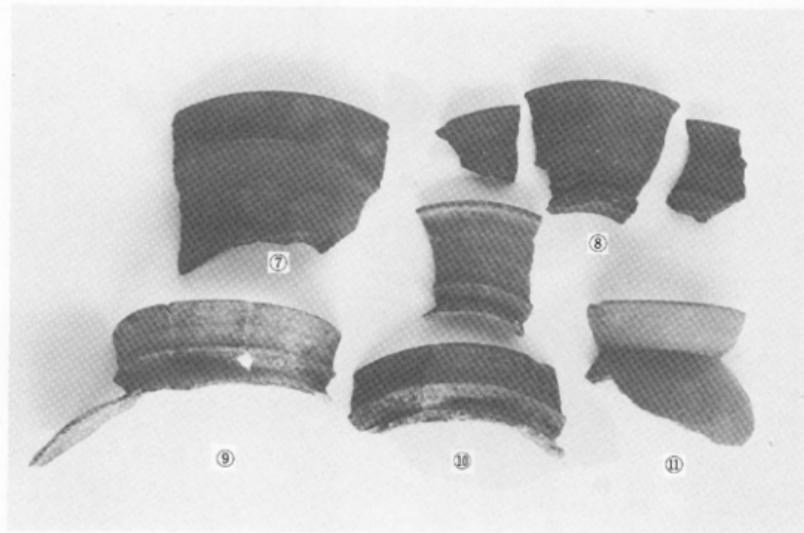
第65図 東部地区出土遺物写真①



第66図 東部地区出土遺物写真②



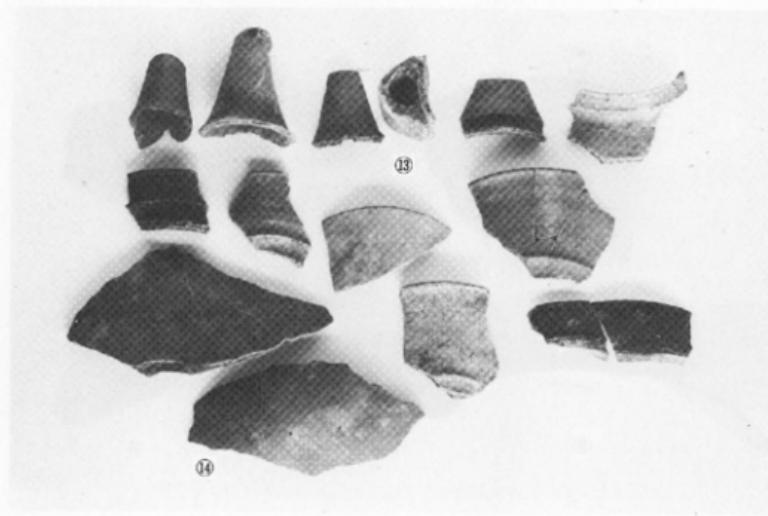
第67図 東部地区出土遺物写真③



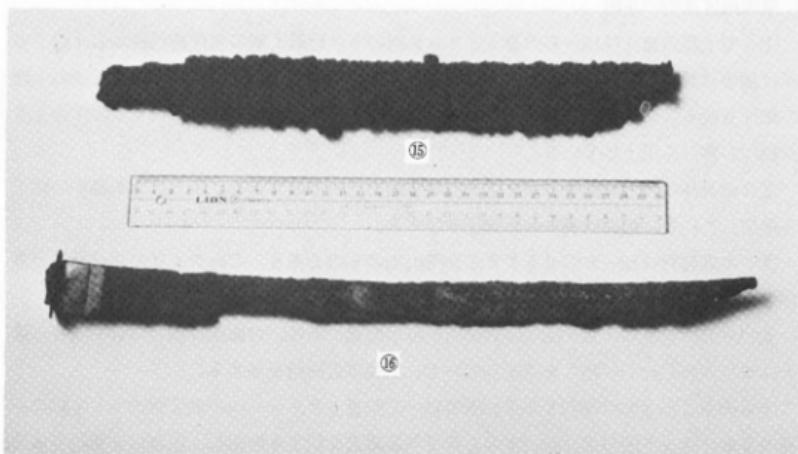
第68図 東部地区出土遺物写真④



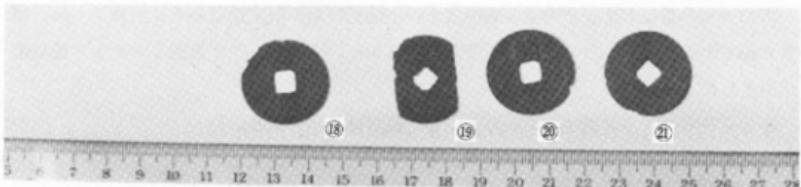
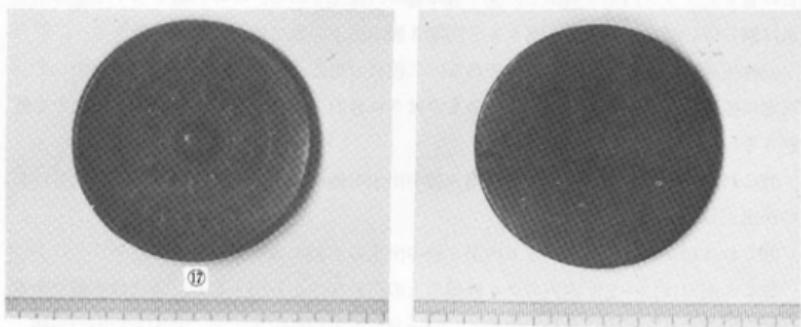
第69図 東部地区出土遺物写真⑤



第70図 東部地区出土遺物写真⑥



第71図 東部地区出土遺物写真⑦



第72図 東部地区出土遺物写真⑧

## (II) 東部地区遺物の説明

①この土器の細片は13-EのⅢ bグリッド内のクロ砂最上層の黄灰褐色砂からその下の赤灰褐色砂層の上部にかけて出土したもので、主に土師器であるが、若干弥生前期の土器の細片も混る。この東都地区に於いては、第1層から第2層の上面にかけてこの①のような細片が夥しく出土している。

②この高杯は12-EのⅡ bグリッド内第3層出土のものである。胎土はきめ細かい粘土を使用している。色調は鮮かな赤褐色を呈する。

③この低脚杯は12-EのⅡ bグリッド内出土のものである。このタイプの高杯はこの遺跡で多く見受けられる。胎土はややきめ細かい粘土を使用し、色調は黄灰色である。

④13-EのⅢ bグリッド内第3層中出土の小型甕である。口縁部は複合口縁が残り、胎土はややきめの細かい粘土を使用している。色調は黄灰色を呈する。

⑤⑥两者とも器形は器台である。⑤は13-EのⅢ bグリッド内の第3層出土、⑥は12-EのⅡ bグリッド内の第3層出土のものである緻密な粘土を使用し、色調は赤褐色である。このタイプの器台も非常に多く出土している。

⑦これは11-D区画内黒砂上表採の大型壺の口縁である。色調は赤褐色である。⑧12-EのⅢ cグリッド内第3層出土。⑨、⑩は甕の口縁部である。この口縁を有する甕の出土量は夥しい。⑪13-EのⅢ bグリッド内第3層中出土の甕で色調は赤褐色である。

⑫弥生前期の土器で、器形は壺である。二枚貝（恐らくサルボウ）の円弧を利用して、肩部に弧文を圧痕している。その他のものはクロ砂直上表採であるが、表面・裏面とも笠磨きを行っている。

⑬これは13-EのⅢ bグリッド内第3層中出土の壺の把手である。壺は仙地区でもいくつか出土している。

⑭これは13-EのⅢ bグリッド内第3層中出土の大型の甕の破片である。

⑮この直刀は13-E区画内のクロ砂直上上の白砂層中から出土した。時代は不明である。

⑯この直刀は白砂中から検出された。14-H付近の白砂中出土で、近辺でこの刀小柄さくわが出土した。その形態・文様からして近世のものと考えられる。

⑰13-EのⅢ cグリッド内第3層中出土の小型彷彿鏡の握持鏡である。直径7.1cm、厚さ6mmである。最近、この鏡の近くで、直徑1.9cm、厚さ1mmの青銅製ミニチュア模造鏡が出土した。

⑲12-E内グリッド第2層中から出土し、銭名は不明である。

⑳同じく12-E内グリッド第2層中から出土し、銭名不明である。

㉑2号墳南側表採。銭名は「政和通宝」。

㉒13-FのⅢ cグリッド内第2層中出土。銭名不明。

## 6. 中央管理棟建設地内緊急調査地区

### (1) 概 観

昭和53年10月25日、下水道処理施設一管理棟建設工事区域内（以下工事区内と呼ぶ）において重機による掘削作業中、13—A区画内でクロ砂が露出しているのを発見、直ちに工事を中断し調査に入った。

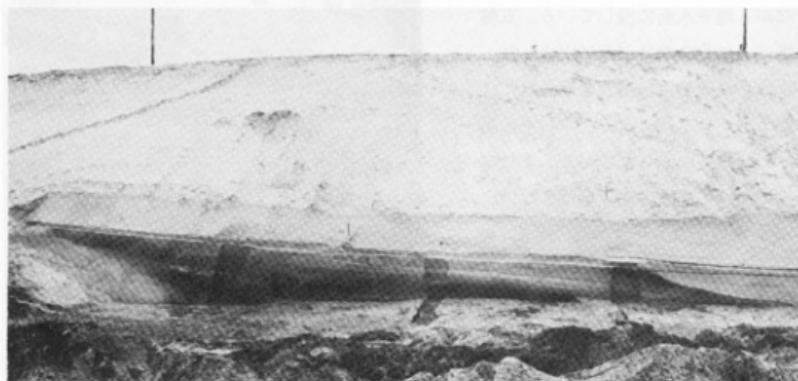
昭和52年度の確認調査ではクロ砂層追求のためグリッドによる試掘を行ったが、保安のため地表から 3 m 50cm から 4 m 50cm までの掘り下げしかできなかった。工事区域内の従来の標高は 15m ~ 17m であった。今回のクロ砂の標高は 3 m ~ 5 m であったため確認調査ではその検出はできな

かったわけである。

この調査では遺物包含層が何層にも分かれ、いわゆるクロ砂層だけが遺物、遺構がある層ではないと判明した。また他の区域では困難であった層位的な把握が比較的容易にできた。おおまかに層位



第73図 緊急調査地区全景写真（南から）



第74図 のり面断面写真（西から）

を述べると(第79図)第1層は室町から安土桃山にかけてのものと思われる五輪塔が検出され、第2層で平安期から鎌倉にかけての遺物が、第3層からは古墳時代後期のものが、第4層では弥生時代前期の遺物がそれぞれ検出されている。しかし第77、78図に見るようにクロ砂層が西へ伸びる部分が重機によって破壊されたため、西側へとの関連がつかめなかつたことは残念である。

#### (2) 五輪塔群(第75、76図参照)

前にも述べたように遺物包含層あるいはわゆるクロ砂は黒色、黒褐色から灰褐色まで砂の色が分かれている。従来考えていた黒色、黒褐色だけが遺物包含層ではない事が推定され、五輪塔群は第1層が西へ伸びその上にのっていたのではないかと推定する。(第77図参照)この第1層(淡灰褐色粘土砂)は西へ少し傾きながら地下水面上に没している。五輪塔は主にこの南の斜面に出土した。これらの五輪塔は積み上げられた状態で出土した例はなく、すべて散乱した状態で検出されている。また各輪に比べて空輪の出土量が少ない。

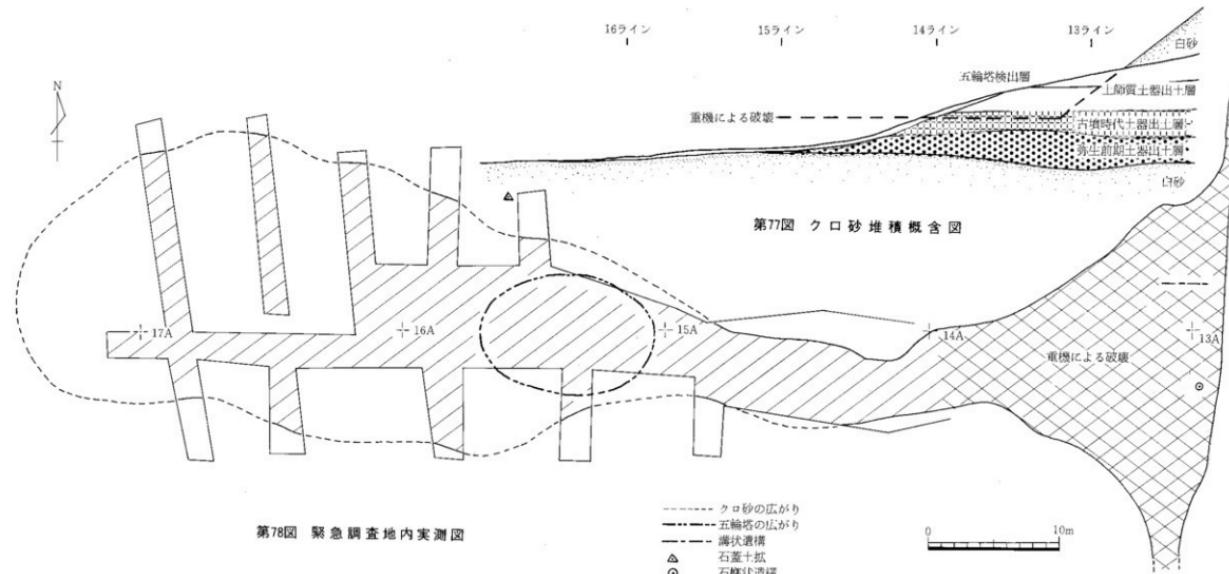
五輪塔下の灰砂層が南に大きく傾いている為、積み上げられていた五輪塔は風などにより南へ倒れたものと思われる。これら五輪塔の乗っている第1層は南に傾き地下水面上に没しているため調査ができなかつた。



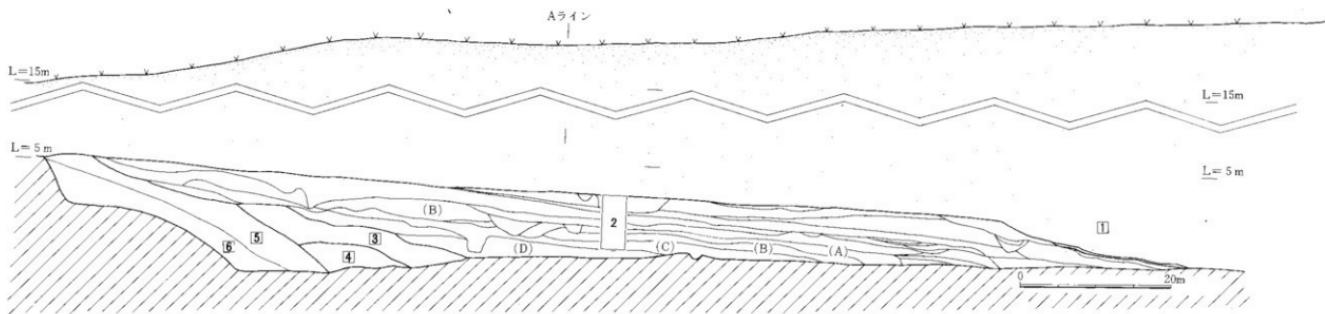
第75図 五輪塔群実測図



第76図 五輪塔群写真



第78図 緊急調査地内実測図



たが、地下水水面下に残りの五輪塔などが埋没している。可能性がある。

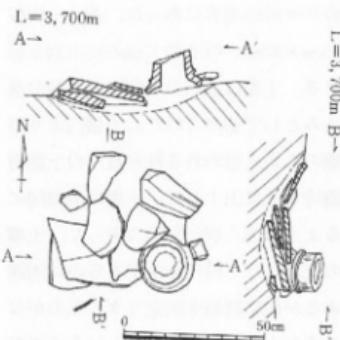
第1層には土器片などの遺物がほとんどなく時期は五輪塔から判断すると、室町から安土桃山にかけてのものと思われる。

#### (3) 石柳状遺構

石柳状遺構(第80、81図)は12-A区画内西側で第2層の(A)～(B)層にかけての層内で検出された。第2層(A)～(B)層では奈良期以後の土師質土器が出土したので、この石柳状の遺構もそれに前後するものと思われる。遺構は十数枚の石を配し、中央を少しくぼませ全体に凹レンズ状になるようにし、1つのコーナーに土製品をおいている。石材は主に安山岩系のものが多く一号墳周辺の小型石棺に使用していた石材に酷似しているものがある。石柳状遺構に使用している土製品は埴質で、整形技法、器形は埴輪のそれと似ているが、円筒埴輪に比べて小形で、厚手である。

#### (4) 石蓋土壤

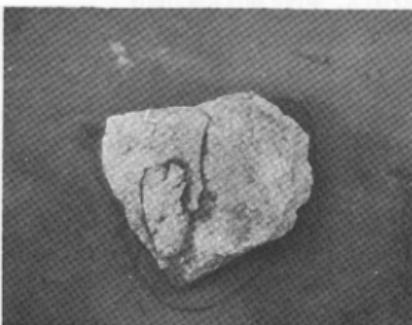
15-B区画内で石蓋土壤を検出した。(第82、83図参照)クロ砂が生成された頃はほぼ全域にわたってクロ砂が白砂を覆っていたと思われるがその後、風蝕、雨蝕等により削られてしまった部分があることがこれまでの調査で明らかになっている。この石蓋土壤は、



第80図 石柳状遺構平面実測図



第81図 石柳状遺構写真



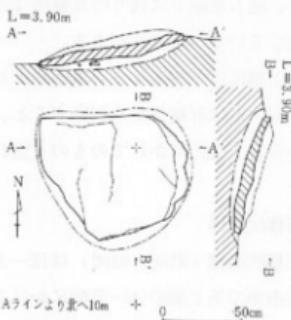
第82図 石蓋土壤写真

そのクロ砂の境界にあった。蓋は一枚板で95cm×80cm、厚さ約7cmの安山岩と思われる。土壙は蓋石の周間に褐色砂の落ち込みとして認められた。土壙内より奈良期のものと思われる杯が数片の土師質土器片と共に出土した。土壙は第83図に見るように浅く底が平坦であった。土壙内の土器だけで時代を決定するのは困難であるが他に時期を決定できるものがなく、また土壙内埋砂中出土という点で奈良時代のものと考える。

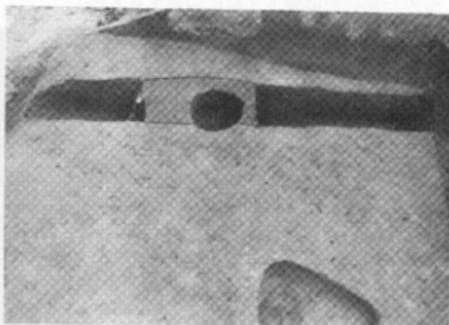
#### (5) 溝状遺構

第2層のD窓から掘り込まれた東西に伸びる溝状遺構を13—B区画内で検出した（第84図）。周囲にはいくつかのピットがあり、土師質土器が多く鉄片（釘と思われる）と共に出土している。溝内には平安から鎌倉にかけての土師質土器を検出した。これは溝の底に密着した状態で出土しなかったが溝の時期はこれと前後するものと思われる。東西に伸びる溝の西は重機により破壊されたためその端はつかんでいない。また東部は厚い白砂のため未調査である。多くの鉄片、柱穴と思われるピット、溝などよりその当時まだ生活の場としていたと思われる。

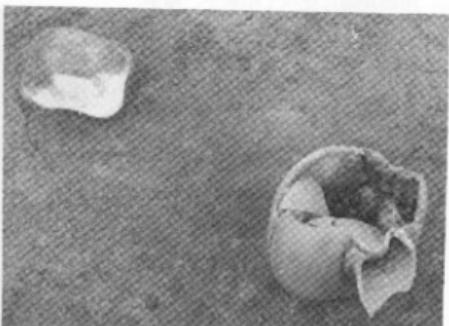
また第2層(D)のすぐ上面で皇朝十二銭（第88図）を検出している。これも溝状遺構1の遺物とほぼ同時代である。



第83図 石蓋土壙実測図



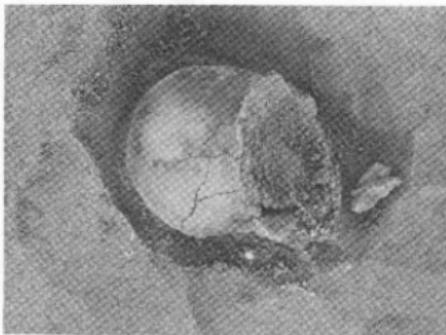
第84図 溝状遺構写真



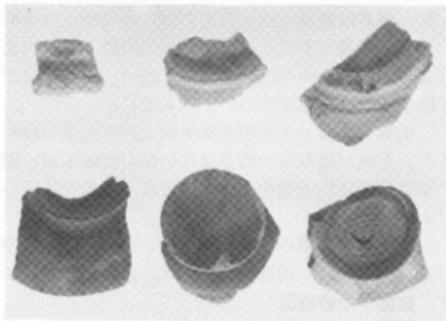
第85図 須恵器写真

#### (6) まとめ

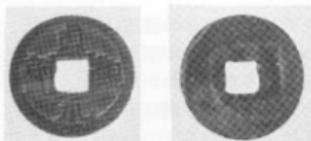
工事中の発見、それに伴う緊急調査であったため、精密な調査ができなかつた事は残念であるが、この調査によりクロ砂に関する多くの知見が我々にもたらされたのは幸いであった。クロ砂は色が明るく淡くなりながら、歴史時代（安土桃山）まで続く事、クロ砂は大きな傾斜を持っている事、さらにある区域では、層位が明確である事など、特に今回の調査で始めて現地下水水面下にクロ砂が存在することが確認できた。（従来のクロ砂とは異なり遺物をほとんど包含しない）クロ砂は厚い所で1m 50cmもありその堆積中に遺跡が複合して存在することが確認できたのである。



第86図 壵写真

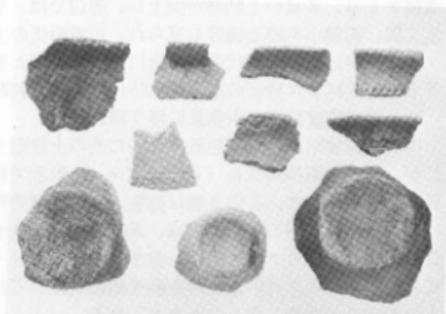


第87図 土師質土器写真



皇朝十二錢 表面 裏面  
(貞觀永寶)

第88図 皇朝十二錢写真



第89図 弥生土器写真

### III まとめ

昭和53年度調査は、10数mに及ぶ灰白色の砂丘砂の除去から始まる。遺構・遺物を包含するクロ砂層の出現は、現在約18,000m<sup>2</sup>の広がりを見せており今後もますます拡大していくと考えられる。

調査の主力は、1号墳及び周辺地区、13-E・13-F区を中心とする東側地区、中央管理棟建設中にクロ砂が出たし緊急調査を行った地区的3地区に大別できる。

#### 1. 1号墳及びその周辺地区

1号墳を中心とした約1,600m<sup>2</sup>の地区内で1号墳の埋葬主体（箱式石棺1基）、箱式石棺14基、中世火葬墓群48基、堅穴住居状6基を調査した。

1号墳は直径33m、高さ2mの円墳で河原石の葺石を貼りつけていた。埋葬主体は墳丘のほぼ中央部にN107°Eの主軸方向を持つ長さ1.85m、幅0.6m、深さ0.3mの箱式石棺である。石棺は板状安山岩を用い蓋石などの間けき部には粘土で目ぼりを施し、内面にはベンガラ塗付し床面等もていねいな作りであった。棺内からは、遺存な状態のよい成人女性人1体が土師器高环3個を組み合せて枕とし、右手に太刀を持ったかの状態で埋葬されていた。周溝部分及び周辺石棺群は、幼児用とみられる小型の箱式石棺10基、大型の箱式石棺2基、特殊なものとして、埴輪円筒棺1基、内部に円筒埴輪を埋納した石棺1基があった。まだ石棺検出の可能性は極めて高い。1号墳並びに周辺石棺群の築造時期は古墳時代中期後半（5世紀後半ごろ）と考える。

火葬墓群は、1号墳周溝東側上層に密集して48基を調査した。クロ砂第1層に複合しており、形状が異なり一様ではないが、長軸1m、短軸0.8m、深さ0.2m程度のだ円形が多い。築造時期は出土遺物もほとんどなく決めてに乏しいが中世の一時期に集中的に使用されたと解する。

また、1号墳の墳丘下からは、古墳建築以前の生活面と考えられる堅穴住居跡状遺構6基を検出した。時期については、古墳築造期とさほど差がないようである。

#### 2. 東部クロ砂地区

東部クロ砂地区（13-E、13-F附近）は、クロ砂層内の遺構状況を把握のため調査を実施したが不明な点が多く次年度の課題としてしまった。しかし、古墳時代前～中期とみられる堅穴状遺構2か所、占墳11基が検出された他に火葬基4基の調査も行った。堅穴状遺構からは、多量の土師群が出土し、周辺では、単独出土ではあるけれども捩丈鏡、小型素文鏡、銅鏡小型模造鏡等も見られ、古墳時代の生活跡を暗示しているようだ。西側のクロ砂境界附近で弥生時代前期の合口土器棺（壺と甌）を検出した。また、東南部の扉葬人骨も地形的にクロ砂形成前の弥生時代のものと判断される。

#### 3. 中央管理棟建設工事中発見に伴う調査区

中央管理棟附近は灰白色砂除去のための土砂取り除きでは、クロ砂の確認はされなかつたが、建設工事標高3m（元の標高16m）附近で傾斜したクロ砂3層が明りょうに色彩が異なり確認された。この3層は弥生、古墳、歴史時代と別れることがわかった。

このクロ砂層内の主な遺構は、五輪塔群、石蓋土壙、石柳状遺構、溝状遺構等である。これらの結果からクロ砂層は、弥生時代から室町～安土桃山時代ごろまでの間形成されたことを物語り、クロ砂形成時の砂丘地は安定しており、それ以降近世～近代の間に10数mもの新砂丘が被覆したものと考えられる。

## 長瀬高浜遺跡Ⅱ

犬神川流域下水道事業に伴う砂丘遺跡の発掘調査概報(1)

発行日 1979 (昭54)・3・31

発行者 財団法人鳥取県教育文化財団

〒680 鳥取市東町1丁目326

県営鳥取武道館内

TEL (0857) 26-8038

印 刷 勝美印刷株式会社鳥取支店  
鳥取県東伯郡羽合町長瀬



県立博物館航空定点写真1978（2万分の1）